

Research Center for World Buddhist Cultures, Ryukoku University

龍谷大学世界仏教文化研究センター

2022 年度 研究活動報告書

龍谷大学世界仏教文化研究センター編 2023.3



Edited and Published by

Research Center for World Buddhist Cultures, Ryukoku University

Research Center for World Buddhist Cultures, Ryukoku University

龍谷大学世界仏教文化研究センター

2022 年度
研究活動報告書

序 文

2022（令和4）年度の「龍谷大学世界仏教文化研究センター研究活動報告書」をお届けします。2015（平成27）年4月に開設された本センターは、本センターの理念を具体化する意図で設置された「アジア仏教文化研究センター」が2020（令和2）年3月末で私立大学戦略的基盤形成支援事業としての研究期間を終え、2020年度からその事業活動を引き継ぐ形で再出発しました。

昨年度は、2020年度から始まった新型コロナウイルスによるパンデミックの影響を受けたため、誠に残念ながら、それまでのような旺盛な研究成果を挙げることはできませんでした。しかし今年度は、オンラインと対面のハイブリッド形式により、2つのシンポジウム、30回ほどの講演会・セミナー等を開催することができました。また、国際社会文化研究所との共催でも研究会を開催することができました。厳しい状況が続く中でも、このような充実した研究活動を展開できたことは、関係者の皆様のご尽力の賜物と考えております。

センター内の基礎研究部門、応用研究部門、国際研究部門の三部門、本研究センターの附属研究センターの「人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター」の主な研究活動の概要につきましては本報告書「主要研究活動概要」をご覧ください。なお、「人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター」の研究活動につきましては別冊の報告書を作成しておりますので、本報告書では研究活動一覧の掲載にとどめております。詳細は別冊の報告書をご覧ください。

本年度も『仏教文化研究叢書』、『世界仏教文化研究論叢』及び *Journal of World Buddhist Cultures*（『世界仏教文化研究』）を発行し、広く国内外に研究成果を発表しました。本研究センターが目指す仏教研究の国際的プラットフォームの実現へ向けて少しでも前進するよう、努力を重ねていく所存です。これからも、皆さまのご協力をよろしくお願い申し上げます。

2023年3月
センター長 脇田健一

2022 年度 研究活動報告書

目 次

序文	i
目次	iii

❖ 2022 年度研究活動一覧 ❖

世界仏教文化研究センター (RCWBC)	3
人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター (CHSR)	17

❖ 主要研究活動概要 ❖

<講演会・研究セミナー>

2022 年 9 月 30 日 ❖ 公開セミナー ❖

「日本における宗教と社会倫理の役割と実践 —戦後日本社会におけるエンゲイジド・ブディズムの特質—	25
---	----

<講演会・研究セミナー>

2022 年 6 月 5 日 ❖ 研究会 ❖

「歌合断簡と残存」 「六百番歌合と歌学書—『顕昭陳状を中心に—』	30
2022年 6月 9日 ❖ コロキアム ❖	
「Medieval Monastic Librarianship at Amanosan Kongoji」	34
2022年 6月 22日 ❖ 研究セミナー ❖	
「日中戦争下における日・「満」仏教者の交流」	38
2022年 7月 20日 ❖ 研究セミナー ❖	
「大谷光瑞の「仏教・真宗」論と社会的活動」	41
2022年 8月 1～2日 ❖ 共同ワークショップ ❖	
「宗教テキスト文化遺産アーカイヴス研究基盤」	44
2022年 8月 6～8日 ❖ 国際ワークショップ ❖	
「第8回『歎異抄』註釈ワークショップ」	47
2022年 9月 22日 ❖ 講演会 ❖	
「室町・戦国の武家と歌合」	51
2022年 10月 7日 ❖ 講演会 ❖	

「摂化する浄土 —真仏土と方便化身土との二重性—	54
2022年10月21日 ❖ コロキアム ❖	
「Soundscapes of the Pure Land? Music, authenticity, and identity in globalizing Jōdo Shinshū」	58
2022年11月25日 ❖ 研究セミナー ❖	
「新国訳大蔵経『無量寿経論』担当の思い出」	63
2022年12月4日 ❖ 研究会 ❖	
「『和歌一字抄』の歌合歌」 「治承二年廿二番歌合をめぐって」	67
2022年12月8日 ❖ 講演会 ❖	
「Neutralizing the Insider Threat: The Madhyamaka Assimilation of the Three-Nature Theory」	71
2023年1月26日 ❖ 研究セミナー ❖	
「『考信録』七巻本の成立過程について」	75
2023年2月16日 ❖ 研究セミナー ❖	
「浄土教礼讃偈の律動」	79
2023年2月16日 ❖ 講演会 ❖	

「越中の三業惑乱と妙好人」 83

2023年2月26日 ❖ 研究会 ❖

「源俊頼の歌合評語—六条藤家への影響をめぐって—」
『四生の歌合』の構造」 86

<その他>

2023年2月26日 ❖ 研究成果 ❖

Buddhist - Christian Studies, Vol.42 89

❖ その他 ❖

龍谷大学世界仏教文化研究センター2022年度研究体制 93

2022 年度
研究活動 一覽

世界仏教文化研究センター（RCWBC）2022 年度研究活動一覧表

❖ 公開セミナー ❖

公開セミナー	
テーマ	日本における宗教と社会倫理の役割と実践 —戦後日本社会におけるエンゲイジド・ブディズムの特質—
開催日時	2022 年 9 月 30 日（金）17：30～20：00
開催場所	龍谷大学大宮学舎清和館 3 階ホール
基調講演	島 蘭 進（上智大学グリーンケア研究所客員所員、大正大学客員教授・東京大学名誉教授）
パネリスト	大河内 秀人（浄土宗僧侶、ソーシャル・ジャスティス基金企画委員） 小原 克博（同志社大学神学部教授） 近藤 俊太郎（本願寺史料研究所研究員） 岩田 真美（龍谷大学ジェンダーと宗教研究センター長）
司会	嵩 満也（龍谷大学国際学部教授）
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター国際研究部門 エンゲイジド・ブディズム研究会
共催	日本エンゲイジドブディズムネットワーク
参加人数	50 名

❖ シンポジウム ❖



シンポジウム	
テーマ	ケアにおける宗教性 大悲に抱かれて心を寄せてそこにいる
開催日時	2022年11月24日(木) 13:30~16:45
開催場所	オンライン (YouTube・ライブ配信)
プログラム	<p>第一部</p> <p>【総合司会】石川 みゆき (龍谷大学実践真宗学研究科1年次生)</p> <p>【第一部進行】鍋島 直樹 (龍谷大学文学部教授)</p> <p>【基調講演①】</p> <p>「ケアにおける宗教性の問題～臨床宗教師養成の10年を振り返る～」</p> <p>講師 高橋 原 (東北大学大学院文学研究科教授)</p> <p>【レスポンス】</p> <p>那須 英勝 (龍谷大学文学部教授/実践真宗学研究科長)</p> <p>望月 真世 (龍谷大学実践真宗学研究科2年次生)</p> <p>保々 光耀 (龍谷大学実践真宗学研究科3年次生)</p> <p>第二部</p> <p>【総合司会】中山 晃耀 (龍谷大学実践真宗学研究1年次生)</p> <p style="padding-left: 40px;">宇佐美 智瑞 (龍谷大学実践真宗学研究1年次生)</p> <p>【第二部進行】森田 敬史 (龍谷大学文学部教授)</p> <p>【基調講演②】</p> <p>「あそかビハーラ病院における僧侶の存在」</p> <p>講師 花岡 尚樹 (あそかビハーラ病院前ビハーラ室長 ビハーラ僧)</p> <p>講師 渡辺 有 (あそかビハーラ病院 ビハーラ僧)</p> <p>【レスポンス】高橋 原</p> <p style="padding-left: 40px;">古谷 謙宗 (龍谷大学実践真宗学研究科3年次生)</p> <p style="padding-left: 40px;">木村 正幸 (龍谷大学実践真宗学研究科2年次生)</p> <p>【まとめ】花岡 直樹・渡辺 有</p> <p>【謝辞】杉岡 孝紀 (龍谷大学文学部教授/実践真宗学研究科長補佐)</p>
主催	龍谷大学実践真宗学研究科
協力	龍谷大学世界仏教文化研究センター 応用研究部門 人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター (CHSR)
参加人数	49名



新春シンポジウム	
テーマ	臨床宗教師の反省と近未来
開催日時	2023 年 1 月 18 日(水)11:00～12:30
開催場所	龍谷大学大宮学舎本館 2 階講堂
登壇者	谷山 洋三
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 応用研究部門 人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター (CHSR)
共催	龍谷大学実践真宗学研究科
参加人数	25 名

(※詳細は世界仏教文化研究センター応用研究部門 2022 年度研究活動報告書を参照のこと)

❖ 講演会・研究セミナー ❖

研究会	
テーマ	歌合の本質とその集積についての研究
開催日時	2022年6月5日(日) 14:00~17:00
開催場所	オンライン開催 (Zoom)
講演者	「歌合断簡と残存」 日比野 浩信 (愛知淑徳大学非常勤講師) 「六百番歌合と歌学書—『顕昭陳状』を中心に—」 鈴木 徳男 (相愛大学名誉教授)
司会	安井 重雄 (龍谷大学教授)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 古典籍資料総合研究班
参加人数	16名

コロキアム	
テーマ	Medieval Monastic Librarianship at Amanosan Kongoji
開催日時	2022年6月9日(木) 17:00~18:30
開催場所	龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室/オンライン開催 (Zoom)
講演者	George Keyworth (サスカチュワン大学准教授、世界仏教文化研究センター客員研究員)
司会	嵩 満也 (龍谷大学教授)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 国際研究部門
参加人数	33名



開催場所	龍谷大学大宮図書館 2 階コモンルーム、龍谷ミュージアム 101 セミナールーム
講演者	<p>8 月 1 日 展示資料選定ワークショップ</p> <ul style="list-style-type: none"> ☞ 聖徳太子関連資料、データ化方法の検討 ☞ 候補資料の一部の展示 ☞ 既往先行研究のレファレンス <p>8 月 2 日 ・石川知彦氏 (ミュージアム副館長)、村松加奈子氏 (同学芸員)</p> <p>による「真宗と聖徳太子」企画展構想報告</p> <p>・展覧会「あの世の美術」を観覧しつつ 「太子」展の展示をシミュレート</p>
司 会	阿部 泰郎 (龍谷大学教授)
主 催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門
参加人数	8 名 / 20 名

国際ワークショップ	
テーマ	The Eighth Workshop on <i>Tannishō</i> Commentarial Materials 第 8 回『歎異抄』註釈ワークショップ
開催日時	2022 年 8 月 6 日 (土) ~ 8 日 (月)
開催場所	大谷大学
プログラム	<p>8 月 6 日 (土)</p> <p>10:00-11:00 Introduction, Discussion on the Aims of the Workshop</p> <p>11:00-12:00 Small Group Translation Session 1</p> <p>12:00-13:00 Lunch Break</p> <p>13:00-14:30 Small Group Translation Session 2</p> <p>14:30-14:50 Break Time</p> <p>14:50-17:00 Small Group Translation Session 3</p> <p>8 月 7 日 (日)</p> <p>10:00-12:00 Small Group Translation Session 4</p> <p>12:00-13:00 Lunch Break</p> <p>13:00-14:30 Presentation Session</p> <p>14:30-14:50 Break time</p> <p>14:50-17:00 Small Group Translation Session 5</p>

~~~~~

|      |                                                                                                                                                                                                                                                        |
|------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|      | 8月8日(月)<br>10:00-12:00 Small Group Translation Session 6<br>12:00-13:00 Lunch Break<br>13:00-14:30 Small Group Translation Session 7<br>14:30-14:50 Break time<br>14:50-17:00 Presentation of small group translations and plans for the next workshop |
| 主催   | 龍谷大学世界仏教文化研究センター (RCWBC)<br>大谷大学真宗総合研究所<br>Center for Japanese Studies and Buddhist Studies, University of California, Berkley                                                                                                                         |
| 参加人数 | 28名                                                                                                                                                                                                                                                    |

| 講演会  |                                       |
|------|---------------------------------------|
| テーマ  | 歌合の本質とその集積についての研究                     |
| 開催日時 | 2022年9月22日(木) 15:15~16:30             |
| 開催場所 | 龍谷大学大宮学舎東翼101教室 / オンライン開催 (Zoom)      |
| 講演者  | 「室町・戦国の武家と歌合」<br>小川 剛生 (慶應義塾大学教授)     |
| 司会   | 安井 重雄 (龍谷大学教授)                        |
| 主催   | 龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門<br>古典籍資料総合研究班 |
| 参加人数 | 126名                                  |

| 講演会  |                                |
|------|--------------------------------|
| テーマ  | 撰化する浄土—真仏土と方便化身土との二重性—         |
| 開催日時 | 2022年10月7日(金) 13:30~15:00      |
| 開催場所 | 龍谷大学大宮学舎清和館3階ホール               |
| 講演者  | 加来 雄之 (大谷大学名誉教授、親鸞仏教センター主任研究員) |
| 司会   | 杉岡 孝紀 (龍谷大学文学部教授)              |

~~~~~

主 催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 親鸞浄土教総合研究班 真宗善本典籍研究プロジェクト
参加人数	51 名

コロキアム

テーマ	Soundscapes of the Pure Land? Music, authenticity, and identity in globalizing Jōdo Shinshū
開催日時	2022 年 10 月 21 日 (木) 17 : 00~18 : 30
開催場所	龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室 / オンライン開催 (Zoom)
講演者	Louella Matsunaga (オックスフォード・ブルックス大学、世界仏教文化研究センター客員研究員)
司 会	那須 英勝 (龍谷大学教授)
主 催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 国際研究部門
参加人数	10 名

研究セミナー

テーマ	新国訳大蔵経『無量寿経論』担当の思い出
開催日時	2022 年 11 月 25 日 (金) 15 : 15~16 : 45
開催場所	龍谷大学大宮学舎北翼 204 教室
講演者	大竹 晋 (宗教評論家、仏典翻訳家)
司 会	内田 准心 (龍谷大学准教授)
コメン テーター	上野 隆平 (龍谷大学講師)
主 催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 特定公募研究「真宗聖教の文献学的研究」
参加人数	33 名


~~~~~

| ワークショップ    |                                                |
|------------|------------------------------------------------|
| テーマ        | アメリカ仏教会における同性婚と HIV パニックへの対応                   |
| 開催日時       | 2022 年 12 月 3 日 (土) 14 : 30~18 : 00            |
| 開催場所       | 龍谷大学大宮学舎 (Zoom 配信併用)                           |
| 講演者        | 小杭 好臣 (元・浄土真宗本願寺派北米開教区総長)                      |
| コメンテーター    | 河口 和也 (広島修道大学教授)                               |
| 総合コーディネーター | 宇治 和貴 (筑紫女学園大学准教授、クィア仏教学研究学会代表)                |
| 主催         | 龍谷大学世界仏教文化研究センター<br>龍谷大学実践真宗学研究科<br>クィア仏教学研究学会 |

| 研究セミナー |                                                                               |
|--------|-------------------------------------------------------------------------------|
| テーマ    | 歌合の本質とその集積についての研究                                                             |
| 開催日時   | 2022 年 12 月 4 日 (日) 15 : 00~18 : 00                                           |
| 開催場所   | オンライン開催 (Zoom)                                                                |
| 講演者    | 「『和歌一字抄』の歌合歌」<br>藏中 さやか (神戸女学院大学教授)<br>「治承二年廿二番歌合をめぐって」<br>中村 文 (日本女子大学非常勤講師) |
| 司会     | 安井 重雄 (龍谷大学教授)                                                                |
| 主催     | 龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門<br>古典籍資料総合研究班・古典籍資料研究プロジェクト                           |
| 参加人数   | 15 名                                                                          |

| 講演会 |
|-----|
|-----|

~~~~~

テーマ	Neutralizing the Insider Threat: The Madhyamaka Assimilation of the Three-Nature Theory (「仏教内部からの脅威を無効にする—三性説の中観派的同化—」)
開催日時	2022年12月8日(木) 15:15~16:45
開催場所	龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室
講演者	Anne MacDonald (オーストリア科学アカデミー)
司会	能仁 正顕 (龍谷大学教授)
コメンテーター	桂 紹隆 (龍谷大学名誉教授)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 大蔵経総合研究班・大蔵経研究プロジェクト
参加人数	25名

研究セミナー	
テーマ	『考信録』七巻本の成立過程について
開催日時	2023年1月26日(木) 17:30~19:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室
講演者	西村 慶哉 (龍谷大学世界仏教文化研究センター嘱託研究員)
司会	内田 准心 (龍谷大学准教授)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 親鸞浄土教総合研究班・真宗学研究プロジェクト
参加人数	6名

講演会	
テーマ	聖典としての大乗経典
開催日時	2023年2月10日(金) 15:00~18:00
開催場所	オンライン開催 (Google Meet)
講演者	下田 正弘 (東京大学大学院教授)

~~~~~

|      |                                                      |
|------|------------------------------------------------------|
| 司 会  | 能仁 正顕 (龍谷大学教授)                                       |
| 主 催  | 龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門<br>大蔵経総合研究班 仏教古典籍・大蔵経の文献学的研究 |
| 参加人数 | 34 名                                                 |

| 研究セミナー  |                                                |
|---------|------------------------------------------------|
| テーマ     | 浄土教礼讃偈の律動                                      |
| 開催日時    | 2023 年 2 月 16 日 (木) 13:30~15:00                |
| 開催場所    | 龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室                             |
| 講演者     | 齊藤 隆信 (佛教大学教授)                                 |
| 司 会     | 佐々木 大悟 (龍谷大学准教授)                               |
| コメンテーター | 内田 准心 (龍谷大学准教授)                                |
| 主 催     | 龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門<br>特定公募研究「真宗聖教の文献学的研究」 |
| 参加人数    | 26 名                                           |

| 講演会  |                                                   |
|------|---------------------------------------------------|
| テーマ  | 越中の三業惑乱と妙好人                                       |
| 開催日時 | 2023 年 2 月 16 日 (木) 17:00~18:30                   |
| 開催場所 | 龍谷大学大宮学舎北翼 106 教室                                 |
| 講演者  | 森越 博 (氷見市立図書館元館長)                                 |
| 司 会  | 殿内 恒 (龍谷大学教授)                                     |
| 主 催  | 龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門<br>特定公募研究「大瀛『横超直道金剛鐱』の研究」 |
| 参加人数 | 21 名                                              |

~~~~~

研究セミナー	
テーマ	和歌の本質とその集積についての研究
開催日時	2023年2月26日(日) 14:00~17:00
開催場所	オンライン開催 (Zoom)
講演者	「源俊頼の歌合評語—六条藤家への影響をめぐって—」 溝端 悠朗 (高野山大学専任講師) 『四生の歌合』の構造 大山 和哉 (同志社大学助教)
司会	安井 重雄 (龍谷大学教授)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 古典籍資料総合研究班・古典籍資料研究プロジェクト
参加人数	17名

講演会	
テーマ	異文化理解と多文化共生 —仏教・キリスト教・イスラームの実践的対話に向けた比較宗教学—
開催日時	2023年3月13日(月) 12:30~16:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎清和館3階ホール (Zoomで同時配信)
講演者	「念仏思想の比較宗教的考察」 积 徹宗 (相愛大学学長) 「トルコにおける多宗教の交流」 佐野 東生 (龍谷大学教授)
司会	久松 英二 (龍谷大学教授)
コメンテーター	鶴岡 賀雄 (東京大学名誉教授) 村山 木乃実 (日本学術振興会 PD) 松長 昭 (事業創造大学院大学客員教授) M. Dündar (トルコ国立アンカラ大学教授)
主催	龍谷大学国際社会文化研究所主催 龍谷大学世界仏教文化研究センター共催
参加人数	40名

講演会	
テーマ	デジタル・ヒューマニティーズ最前線
開催日時	2023年3月13日(月) 15:00~17:00
開催場所	オンライン開催 (Zoom)
講演者	「人文学とコンピュータ、その過去・未来・現在」 永崎 研宣 (一般財団法人人文情報学研究所 主席研究員) 「美術史・文化財研究とデジタルヒューマニティーズー顔貌コレクションによる日本中世絵巻の分析を例に一」 高岸 輝 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)
主催	龍谷大学古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センター主催 龍谷大学世界仏教文化研究センター 基礎研究部門 西域総合研究班共催
参加人数	45名

研究会	
テーマ	In search of the Rainbow-coloured Dharma: Queerness and Buddhism
開催日時	2023年3月17日(金) 13:00~16:00
開催場所	龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室 (Zoom で同時配信)
講演者	Bee Scherer (アムステルダム自由大学教授)
コメンテーター	宇治 和貴 (筑紫女学園大学准教授)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 国際研究部門主催 クィア仏教研究会共催
参加人数	18名

講演会	
テーマ	宗教文化遺産学の挑戦
開催日時	2023年3月26日(日) 14:00~17:00



開催場所	オンライン開催 (Youtube 配信)
講演者	<p>「宗教遺産としての中世キリスト教美術」 木俣 元一 (名古屋大学人類文化遺産テキスト学研究センターセンター長)</p> <p>「古代ギリシアの宗教文化遺産と文化的記憶—パウサニアスの『ギリシア案内記』を中心に—」 周藤 芳幸 (名古屋大学人文学研究科研究科長)</p> <p>「宗教遺産テキスト学の創成—中世寺院の知のネットワーク—」 阿部 泰郎 (龍谷大学教授)</p>
司 会	道元 徹心 (龍谷大学教授)
コメンテーター	<p>ハルオ・シラネ (コロンビア大学東アジア学部教授)</p> <p>入澤 崇 (龍谷大学学長)</p>
主 催	<p>龍谷大学世界仏教文化研究センター</p> <p>名古屋大学人類文化遺産テキスト学研究センター</p>
参加人数	92 名

人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター(CHSR) 2022 年度研究活動一覧表

❖ 特別講義 ❖

特別講義	
テーマ	「親鸞における信仰の構造と実践の関係」
開催日時	2022 年 7 月 7 日 (木) 11:00~12:30
開催場所	龍谷大学大宮学舎北翼 106 教室
講演者	宇治 和貴 (筑紫女学園大学准教授)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 応用研究部門 人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター (CHSR)
共催	龍谷大学実践真宗学研究科

特別講義	
テーマ	「宗教的ケア」
開催日時	2022 年 11 月 10 日 (木) 11:00~12:30
開催場所	龍谷大学大宮学舎北翼 106 教室
講演者	谷山 洋三 (東北大学大学院教授)
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 応用研究部門 人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター (CHSR)
共催	龍谷大学実践真宗学研究科

❖ 特別講演 ❖

「どびだせビャクドー！ ジッセンジャー」	
開催日時	2022年11月2日（水）9：15～10：45
開催場所	龍谷大学大宮学舎東翼101教室
講演者	実践真宗学研究科 jissenjya project 有志
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 応用研究部門 人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター（CHSR）

❖ グリーフケア講話 ❖

グリーフケア講座	
テーマ	「仏教者の社会活動と教義－仏教福祉の歴史からの一考察－」
開催日時	2022年5月17日（火）15：15～16：45
開催場所	龍谷大学大宮学舎北翼101教室
発表者	柱本 惇（あそかビハーラ病院ビハーラ僧・本願寺派布教使）
主催	龍谷大学世界仏教文化研究センター 応用研究部門 人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター（CHSR）
協力	龍谷大学実践真宗学研究科

グリーフケア講座	
テーマ	「臨床宗教師のメタスキル－カフェデモンクコードを読み解く－」
開催日時	2022年6月14日（火）15：15～16：45
開催場所	龍谷大学大宮学舎清和館3階ホール
講演者	金田 諦應 （曹洞宗通大寺住職・日本臨床宗教師会副会長・「カフェ・デ・モンク」主宰）


~~~~~

|     |                                                          |
|-----|----------------------------------------------------------|
| 主 催 | 龍谷大学世界仏教文化研究センター 応用研究部門<br>人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター (CHSR) |
| 協 力 | 龍谷大学実践真宗学研究科                                             |

|                 |                                                          |
|-----------------|----------------------------------------------------------|
| <b>グリーンケア講座</b> |                                                          |
| テーマ             | 「Compassion of Care ケアの慈悲」                               |
| 開催日時            | 2022年10月27日(木) 11:00~12:30                               |
| 開催場所            | 龍谷大学大宮学舎北翼 103 教室                                        |
| 講 師             | Dr. Rev. Nathan Jishin MICHON<br>(日本学術振興会・外国人特別研究員 龍谷大学) |
| 主 催             | 龍谷大学世界仏教文化研究センター 応用研究部門<br>人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター (CHSR) |
| 共 催             | 龍谷大学実践真宗学研究科                                             |

❖ 研 修 ❖

|                                                     |                                                                                                                                                                                        |
|-----------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>2022年度臨床宗教師・臨床傾聴師総合実習 龍谷大学実践真宗学研究科<br/>東北被災地</b> |                                                                                                                                                                                        |
| 開催日時                                                | 2022年6月6日(月)～6月7日(火)                                                                                                                                                                   |
| 開催場所                                                | 仙台、南三陸町、気仙沼市                                                                                                                                                                           |
| 講 師                                                 | 石川 勝紀 (浄土真宗本願寺派東北教区教務所長)<br>高橋 悦堂 (日本臨床宗教師会・認定臨床宗教師、東北臨床宗教師会)<br>井上 芳正 (災害ボランティアセンター)<br>竹澤 さおり (東日本大震災ご遺族)<br>谷山 洋三 (東北大学大学院文学研究科教授 臨床宗教師指導 臨床仏教講座 真宗大谷派僧侶)<br>足利 一之 (浄土真宗本願寺派住職・布教使) |
| 内 容                                                 | <仙台別院・教化センター><br>【追悼法要】<br>【ご挨拶・東北教区災害ボランティアの活動】石川 勝紀<br>【特別講義】<br>「臨床宗教師の実際」高橋 悦堂                                                                                                     |



|     |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     | <p>【活動報告】<br/>「東北教区災害ボランティアセンターの取り組み」井上 芳正</p> <p>【特別講話】<br/>「大震災の悲しみに学ぶ」竹澤 さおり</p> <p>【特別講義】<br/>「臨床宗教師の倫理」谷山 洋三</p> <p>【宗教者間交流】新井 紀孝（臨済宗僧侶）<br/>【宗教者間交流】森田 敬史（融通念仏宗）</p> <p>&lt;臨床実習&gt;<br/>「閑上の記憶」語り部講話<br/>「震災遺構 仙台市立荒浜小学校」シアター</p> <p>&lt;被災寺院 浄土真宗本願寺派専能寺&gt;<br/>【追悼法要】<br/>【特別講義】<br/>「被災寺院の現実と復興への歩み」足利 一之</p> |
| 主 催 | 龍谷大学実践真宗学研究科                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| 協 力 | 龍谷大学世界仏教文化研究センター 応用研究部門<br>人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター（CHSR）                                                                                                                                                                                                                                                                  |

|                                                                      |                                                                                               |
|----------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>2022 年度臨床宗教師・臨床傾聴師総合実習 龍谷大学実践真宗学研究科</b><br><b>あそかビハーラ病院緩和ケア施設</b> |                                                                                               |
| 開催日時                                                                 | 2022 年 11 月 14 日（月）                                                                           |
| 開催場所                                                                 | あそかビハーラ病院緩和ケア施設                                                                               |
| 講 師                                                                  | 渡辺 有（アソカビハーラ病院ビハーラ僧・認定臨床宗教師）                                                                  |
| 内 容                                                                  | <p>【多職種カンファレンス参加】<br/>【講義】<br/>「あそかビハーラ病院におけるビハーラ僧」渡辺有<br/>【夕方のお参り】柱本 惇（ビハーラ僧）<br/>【振り返り】</p> |
| 主 催                                                                  | 龍谷大学実践真宗学研究科                                                                                  |
| 協 力                                                                  | 龍谷大学世界仏教文化研究センター<br>人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター（CHSR）                                              |

~~~~~

2022 年度臨床宗教師・臨床傾聴師総合実習 龍谷大学実践真宗学研究科 「被爆寺院のグリーフケアと復興・中国地方臨床宗教師会の活動に学ぶ」	
開催日時	2022 年 10 月 3 日 (月)
開催場所	超覚寺、広島平和記念資料館
講師	和田 隆彦 (真宗大谷派超覚寺住職)
内容	<p><超覚寺></p> <p>【追悼法要】和田 隆彦</p> <p>【講義①】 「超覚寺門徒の被爆と復興」和田 隆彦</p> <p>【講義②】 「自死遺族を支える集い」和田 隆彦</p> <p>【質疑応答】</p> <p>【墓地参拝】</p> <p>【自死遺族会との交流】</p> <p><元安橋・原爆ドーム・広島平和記念公園></p> <p>【追悼法要】 折り鶴ブースに折り鶴をささげる 広島平和記念資料館研修 研修振り返り</p>
主催	龍谷大学実践真宗学研究科
協力	中国地方臨床宗教師会 (柘野統胤代表) 龍谷大学世界仏教文化研究センター 人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター (CHSR)

2022 年度臨床宗教師・臨床傾聴師総合実習 龍谷大学実践真宗学研究科 「神戸赤十字病院研修・災害時における心のケア・DMORT 新型コロナウイルス感染対策の中で」	
開催日時	2022 年 12 月 9 日(金)
開催場所	オンライン開催 (Zoom)
講師	村上 典子(神戸赤十字病院 心療内科部長・医学博士) 鍋島 直樹 (龍谷大学文学部教授・大学院臨床宗教師研修主任)
日程	【阪神淡路大震災・福知山脱線事故追悼】

~~~~~

|                   |                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|-------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p><b>内 容</b></p> | <p>【特別講義①】<br/> 「心療内科医としての歩み 被害時における遺族への心のケア」<br/> 村上 典子</p> <p>【グループワーク】<br/> 進行：黒川 雅代子（龍谷大学短期大学部教授）</p> <p>【特別講義②】<br/> 「DMORT とは その誕生と目的」<br/> 村上 典子</p> <p>【特別講義③】<br/> 「金子みすゞの縁起的生命観—みすゞの自死を考える」<br/> 鍋島 直樹</p> <p>【グループワーク】<br/> 村上 典子、黒田 綾（心療内科副部長 医師）、<br/> 増尾 佐緒里（臨床心理士、公認心理士）</p> |
| <p><b>主 催</b></p> | <p>龍谷大学実践真宗学研究科</p>                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| <p><b>協 力</b></p> | <p>神戸赤十字病院<br/> 龍谷大学世界仏教文化研究センター<br/> 人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター（CHSR）</p>                                                                                                                                                                                                                      |

（※詳細は世界仏教文化研究センター応用研究部門 2022 年度研究活動報告書を参照のこと）

---

2022 年度  
主要研究活動 概要

---



❖ 公開セミナー ❖

公開セミナー

日本における宗教と社会倫理の役割と実践  
—戦後日本社会におけるエンゲイジド・ブディズムの特質—

2022年9月30日(金)17:30~20:00

龍谷大学大宮学舎 清和館3階ホール





❖ 概 要 ❖

2022年9月30日（金）、今年度第1回の龍谷大学世界仏教文化研究センター公開セミナー「日本における宗教と社会倫理の役割と実践—戦後日本社会におけるエンゲイジド・ブディズムの特質—」が開催された。本セミナーでは、島菌進氏による基調講演の他、大河内秀人氏、小原克博氏、近藤俊太郎氏、岩田真美氏によるコメントおよび、登壇者全員によるパネルディスカッションが行われた。司会・進行は嵩満也氏（龍谷大学国際学部教授）が担当した。

はじめに、嵩氏が今回の公開セミナーの趣旨と目的について紹介をした後、島菌氏による基調講演が行われた。

講演者：島菌進氏

（上智大学グリーンフケア研究所客員所員・大正大学客員教授・東京大学名誉教授）



島菌氏

島菌氏は、古代インドや現代タイをはじめ、現代日本における宗教と社会倫理の役割および実践について発表した。現代タイにおける仏教を擁護する国王と在家の目標は「正法」の理念をより広げることであり、これは古代インドのクシャトリヤ（武士王族階級）が目



指したダルマを基にして世を治めるという理念と類似している。戦後日本では、戦時中の日本における仏教が果たした役割について盛んに議論された。中村元は仏教のこのような社会倫理について『宗教と社会倫理』に詳細に論じている。氏によれば、国家を主導する理念は既に古代インドの宗教の中にあり、仏教史ではその代表的な例はアショーカ王である。その意味で、世を治めることで正法を広めるといった理念は、仏教本来の思想であったとも言える。それと同時に注意すべきは、大乘仏教における宗教団体は、常に国王から距離を置き、政治と関与しないスタンスをとっていたことが歴史的に確認できることである。

例えば、日蓮の『立正安国論』では「正を持って国を安んずる」ことが論じられており、日蓮宗が近代の日本社会では大きな影響力も持った。これは、アショーカ王のように王権をもとにして社会参加する宗教観と類似している。しかしそれは、政教分離制度が浸透した現代社会では、個々の自律的な社会参加が主流に変わった。また、公共宗教として、宗教的な基盤を持ちつつ多様な思想が併存する近代の民主主義社会では、発言や行動（例えば、教育や福祉などの分野よく見られるように）を通して、宗教の社会倫理を世に及ぼしていくということが起こっている。そのことは、江戸時代の寺子屋の事例から分かるように、前近代の日本でも珍しくはなかった。さらに遡れば、行基や空海、そして忍性のような僧侶が、国家の支持を得ずに平和や社会教育や福祉のために行動した例は多数確認することができる。このような行動が宗教の社会倫理のモデルとなったのである。世俗化によって宗教の影響力が後退する一方、公共宗教としての自覚をもつ宗教がその影響力を増していると考えられる。

しかし、明治維新から敗戦までの80年の間は、日本の伝統仏教にとっては自律性をもって社会倫理的な言論や行動が難しかったことは事実である。それは、国家が建前上、信教の自由を掲げながらも、ある種の宗教的な枠を持っており、その枠を超えることを許容しなかったからである。「皇道仏教」などはこうした考えの延長線上に存在していたと言える。

その一方で、こうした国家への従属に全面的に呑み込まれることなく、仏教的な社会倫理を主張し、それを社会活動に具体化していく事例も少なからず見られた。例えば、日蓮宗の支持者であった宮沢賢治の作品の中には、国粋主義的な思想は見られない。同じく、浄土宗の僧侶であった渡辺海旭のように、大正期の仏教界の社会事業をリードした人物もいる。しかし、明治後期・大正期の日本におけるこうした社会参加型のエンゲイジド・ブディズムは、1930年代の全体主義のうねりのなかに呑み込まれることになった。

戦後日本では、戦争責任の問題や差別問題との取り組みを通して、伝統仏教の社会倫理

の顕在化が進んできた。とりわけ、戦後の仏教教団において「正法」の語が一定の役割を果たした代表的な事例として、女性の活躍の場となった曹洞宗の「御詠歌講」が挙げられる。1952年11月にスタートされたこの御詠歌講の目的の一つとして、「本講は正法に依拠し、仏祖の恩徳を讃仰して、詠歌を奉唱する本宗の僧侶及び檀信徒を講員として、その信念を培養し、資質を向上するを以て目的とする。」ということが謳われた。このことから分かるように、ここでは「正法」の概念が重視されている。また、1960～90年代にかけて、世界宗教者平和会議（WCRP、RfP）による世界規模の平和運動もある。さらに、80・90年代の社会支援活動としては、シャンティ（シャンティ国際ボランティア会、1980年）やアーユス（アーユス仏教国際協力ネットワーク、1993年）などが、代表的な事例が挙げられる。2000年代に入ると、伝統仏教によるこうした社会参加への関心は、原発災害、環境問題、人権、化学的な倫理などといった新たな問題へ変遷していくことになる。2011年の東北地方太平洋沖地震および福島第一原発事故の後、災害支援や防災、地域社会での臨床宗教師、さらには生命科学の倫理的限界の議論など新たな社会倫理的な取り組みがなされている。現在、日本の宗教に問われているこうした問題は、これからの仏教界の大きな責任でもある。



小原 氏（コメンテーター）

登壇者の諸氏によるコメントの後、嵩氏の司会のもとで全員がパネルディスカッションを行い、活発な議論を交わした。島菌氏は、岩田氏の日本におけるSDGs取り組みやジェン

ダー問題についての言及に対して、これからは他者に対する接し方および社会的な包摂の在り方が重要ではないかと指摘した。小原氏は、浄土真宗における「弥陀の本願」はキリスト教（とりわけプロテスタント教）における信仰のみによって救われるという概念と似ており、こうした考えは場合によって、自己正当化にといった危険性につながる恐れがあると述べた。最後に聴衆者からのコメントの後、本公開セミナーが終了を迎えた。



パネルディスカッション



聴衆からのコメントの様子

---

❖ 講演会・研究セミナー ❖

---

---

古典籍資料総合研究班 古典籍資料研究プロジェクト  
「歌合の本質とその集積についての研究」

歌合断簡と残存

六百番歌合と歌学書—『顕昭陳状』を中心に—

2022年6月5日(日)14:00~17:00

オンライン開催 (Zoom)

---



安井 氏 (司会)

---

---

❖ 概 要 ❖

---

---

2022年6月5日（日）、古典籍資料総合研究班主催の古典籍資料研究プロジェクト「歌合の本質とその集積についての研究」の一環として、日比野浩信氏（愛知淑徳大学非常勤講師）と鈴木徳男氏（相愛大学名誉教授）を講師に招き研究集会が開催された。日比野氏は「歌合断簡と残存」、鈴木氏は「六百番歌合と歌学書—『顕昭陳状』を中心に—」と題して研究報告を行った。安井重雄氏（龍谷大学文学部教授）の司会の下、両氏の報告に続き、参加者全員での討論が行われた。

---

講演者：日比野 浩信 氏（愛知淑徳大学 非常勤講師）

---

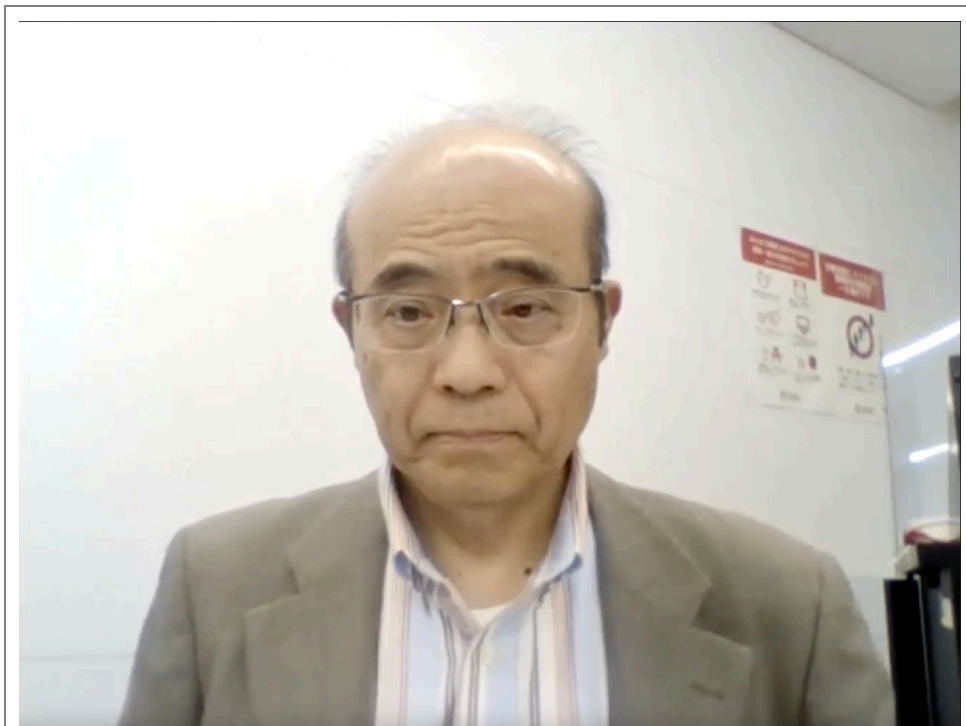


日比野 氏

日比野氏は、綿密な調査を踏まえて、歌合の古筆切の残存状況を概観した上、その利用状況の特徴をまとめた。氏によると、歌合断簡の残存は古筆切に占める割合としては極めて少ない。平安時代の歌合は、ほぼ『十卷本類聚歌合』や『二十卷本類聚歌合』によって

伝播し、断簡として残るものはかなり限定的である。また歌合は、一部を除き、さほど広く享受されていたとは考えにくく、歌合集成・歌合部類の類は、選択されたものではなく、残存していたものである可能性がある。それに伴い、歌合の利用の幅も、必然的に限られたものとならざるを得ないという。次いで、『新宮撰歌合』の「伝素眼筆切」（個人蔵）や、『六百番歌合』の「伝後京極良経筆切」（個人蔵）や、『千五百番歌合』の「伝後小松院筆切」（個人蔵）など新出の断簡資料を紹介しつつ、それらの資料的価値および研究にもたらず広がり展望した。最後に、『二十卷本類聚歌合 卷第二十 模写卷』（個人蔵）を取り上げて、模写資料の効用を提示した。

講演者：鈴木 徳男 氏（相愛大学 名誉教授）



鈴木 氏

鈴木氏は、顕昭が六百番歌合の俊成判に対する反駁、すなわち『顕昭陳状』を中心に、六百番歌合の歌学的側面について報告した。まず顕昭が『顕昭陳状』を著すに至るまで、六百番歌合はどのような場であったかを、主に規模や次第といった行事形態の面から確認した。次いで、「をろのはつをにかぐみかけ」「かひやがした」「そがぎく」のような、顕昭

---

が自詠に詠み込んだ難義語の具体例をめぐり、俊成判と比較しながら、六条家歌学に対する顕昭の姿勢を検証した。顕昭は『顕昭陳状』において、六条家歌学（藤原清輔説）を強く意識しており、時に従来の自説（『袖中抄』記載の説）を枉げても、御子左流の歌学に対抗する立場に立つという。最後に、以上の考察を踏まえて、『袖中抄』の成立と『顕昭陳状』との関係を考え、さらに、顕昭本『俊頼髓脳』の校合年月日の記述の背景を探った。すなわち、六百番歌合の俊成判詞を閲覧したことは、顕昭が『俊頼髓脳』を校合するきっかけになったのではないかという。





❖ コロキアム ❖

コロキアム

Medieval Monastic Librarianship at Amanosan Kongoji

2022年6月9日(木) 17:00~18:30

龍谷大学大宮学舎 西翼 2階大会議室 / オンライン開催 (Zoom)



嵩氏(司会)





---

---

❖ 概 要 ❖

---

---

2022年度6月9日(木)、George Keyworth氏によるコロキアム「Medieval Monastic Librarianship: Amanosan Kongōji: What Sacred Teachings Documents and Books (*shōgyō* 聖教) Tell Us We Do Not Know about the History of Medieval East Asian Buddhism」が開催された。本発表では、Keyworth氏が日本中世の大寺院の経蔵にはどのような種類の文献が収蔵されていたのかを中心に報告した上で、氏が現在調査を進めている天野山金剛寺所蔵の文献群について紹介した。

---

講演者：George Keyworth氏 (サスカチュワン大学 准教授)

---



Keyworth 氏

大蔵経(一切経、蔵経)は中国、韓国、そして日本の仏教界で共通して用いられる経典であるが、中国や韓国、日本で書かれた大蔵経以外の宗教書も経典として日本の中世寺院に所蔵された。日本における寺院の所蔵目録の作成は古くから行われ、例えば平安時代に

宇多天皇や醍醐天皇の命によって行われたことが知られている。この際には、中国で仏教を学んだ留学僧が持ち帰ってきた文献を所蔵する大寺院を中心として目録が作成された。そして、日本では少なくとも12世紀までには、経典と分類されるものの他、聖教と呼ばれる文献群が寺院の所蔵目録に登場してくる。氏によると、当時の京都や奈良の大寺院の経蔵には、大蔵経のほか、聖教が収蔵されていた。しかし、これらの大寺院の文献の多くは火災や戦火によって失われた。

1980年代以降、主に真言宗寺院所蔵の文献調査が盛んに行われ、研究者によって聖教とされる文献群の分類がなされた。聖教は以下の6つのグループに分類できる。①教学・教義（写経本、版本、聞書、抄物、論議など）、②行法（儀軌、次第、作法、願文、声明、讃、日記など）、③歴史（縁起、由来、由緒、伝記、寺誌など）、④語学（辞書、音義など）、⑤伝授書類（血脈、印可状など）、⑥その他（目録、図像など）。

聖教は、教学にかかわるものと宗教実践（事相）にかかわるものがある。前者は、僧侶が何を学ぶべきかについて記述したものであり、いわば僧侶の教育課程に当たる。後者は、儀式や宗教行為の種類やそれらをいかに行うのかについて具体的に述べたものである。聖教には、奥書が付随したこともあるため、制作背景や伝来についてもある程度知ることができる。



質疑応答



発表の後半には、具体的な事例として大阪府河内長野市の真言宗寺院・天野山金剛寺所蔵の文献に関する紹介があった。同寺院では12世紀から17世紀にかけて伝法会が開催されており、教学と事相を学ぶ真言密教の修行道場であった。ここには、平安時代から鎌倉時代にかけて作成された経典と54の経箱に収められた聖教が所蔵されている。計8000点にのぼる文献のうち、約6500点は保存状態が良く、約3000点に奥書がある。これらの文献は、関西地域の関連真言宗寺院間でも回覧されていた可能性がある。こうした目録と所蔵文献を照らし合わせ、また様々な目録の内容を精査し比較検討することで、そこで教義がどのように学ばれ実践されていたのか、そしてそれらがどのように展開していったのかを明らかにすることができる。

質疑応答では、Keyworth氏と共に研究を進めている研究者からの建設的なコメントがあり、情報交換なども行われた。また、どのような人々が目録作成に携わったのか、そして現代の研究者による聖教の分類は当時の人々の意識をどの程度反映しているのか、などの質問がなされた。



オンライン参加者による質疑応答



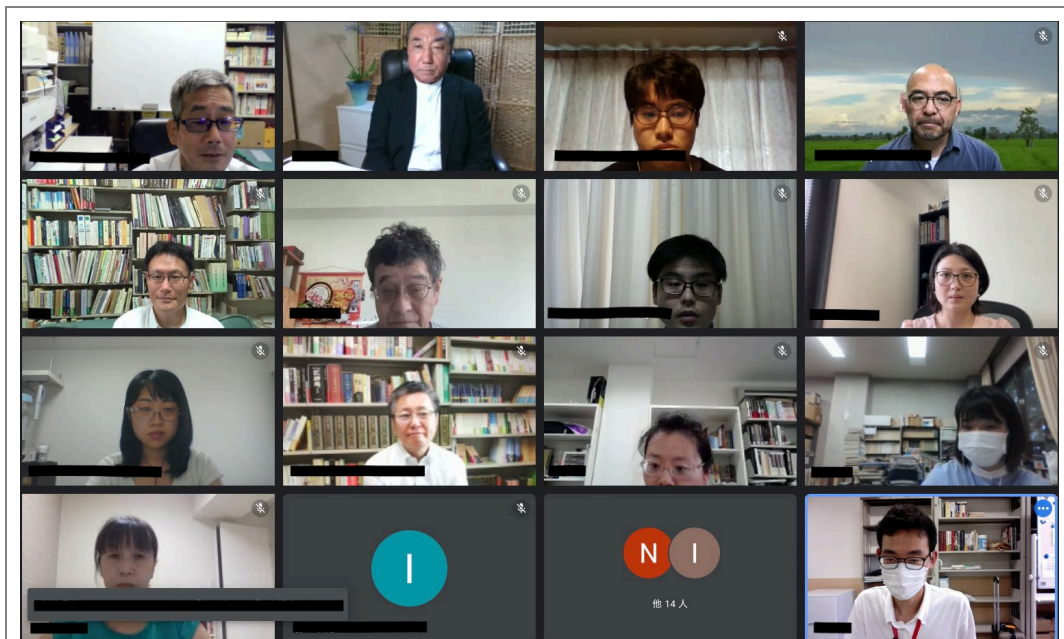
❖ 講演会・研究セミナー ❖

仏教史・真宗史総合研究班  
「近現代アジアにおける仏教の所在と社会的役割」

日中戦争下における日・「満」仏教者の交流  
— 第二回汎太平洋仏教青年会大会への参加をめぐって —

2022年6月22日(水)13:30～15:00

オンライン開催 (Google Meet)



オンライン会場





---

---

❖ 概 要 ❖

---

---

2022年6月22日、野世英水氏（龍谷大学非常勤講師）による「日中戦争下における日・「満」仏教者の交流」と題する講演会を開催した。野世氏は近代真宗史、特に戦争下の布教活動にかかわる研究成果を蓄積した上、本講演では第二回汎太平洋仏教青年会大会の開催に焦点を当てて、当時の「満洲国」仏教者の参加意図や、それが後の日中仏教者間の交流に及ぼした影響などについて論じた。

コロナ禍にともなう感染防止のため、本研究セミナーは Google Meet によるオンライン開催となった。中西直樹氏（龍谷大学教授）の司会の下、野世氏の講演に続き、参加者全員での討論が行われた。

---

講演者：野世英水氏（龍谷大学 非常勤講師）

---



野世氏

野世氏は、1934年に日本の仏教者により開かれた第二回汎太平洋仏教青年会大会における、「満洲国」仏教者参加問題についての論考が少ないとして、「第二回汎太平洋仏教青年会大会の開催」、「満洲国」仏教者の大会参加と如光、「如光の略歴と人物像」、「満洲国」

仏教者と関係する日本人仏教者」といった面からその一端を浮かび上がらせた。

まず、第二回汎太平洋仏教青年会大会開催当時の日本国内外の情勢をはじめ、大会の日程、各国代表団参加人数、大会役員および参加経費について紹介する。注目すべきは、大会役員には、高楠順次郎のような著名な学者や、大谷尊由のような日本政府の権力中枢に連なる人物とともに、「満洲国」仏教代表団の如光も副会長として名を連ねていること、および「満州国」代表団の参加経費として外務省文化事業部より 5000 円の助成金（大会の運営経費の予算は約 10 万円）があったことである。日本政府の影響力のもとで大会が運営されていたことが窺えるからである。

ついで、「満洲国」の成立事情および中国東北部の仏教状況を提示しつつ、日本仏教各宗派による中国東北部での活動についても論及した。大会副会長に推戴された如光に注目し、その初日夜の記念講演や、大会終了後の感想を分析することによって、如光の一連の活動や言動は「満洲国」を肯定、支持し、その発展を願ってのものであり、それはまた「満州国」仏教代表団においても同様であることを浮き彫りにした。また、大会翌年に「新京」で宗教座談会が開催され、出席者の大村桂巖、今井昭慶、平島敏夫による如光の活動への評価を通して、日本の仏教界や外務省文化事業部をはじめ日本政府が、「満州国」の仏教者たちを大会に参加させていった意図を探った。つまり、「満州国」の成立を国際社会に知らしめるとともに、それへの肯定や支持を謀ったのだ。しかし、これに起因して、中国仏教者の不参加問題が生じ、日中仏教者の関係はさらに悪化していくこととなるという。

さらに、野世氏は如光の略歴およびその人物像に対する見解を述べた。如光はハルビン極楽寺の二代目の住職として、隠居後もなお影響力を持っていたとされる。一般的に中国側の研究者は、如光を帝国主義の日本への協力者として批判している。1937 年当時の日本側における宗教調査においても、如光は親日主義者であるとされていた。野世氏は、如光は中国東北部における中心的な仏教者であり、その影響を受けた仏教者は数多くいたと評価した。

最後に、「満洲国」仏教者と関係する日本人仏教者について紹介した。中国東北部で活動していた日本仏教者には特務機関の部員やそれとの関係深い人物が含まれることと、東北部仏教界と日本天台宗や浄土真宗本願寺派と深い関係を持っていたことと述べ、野世氏は講演を締めくくった。



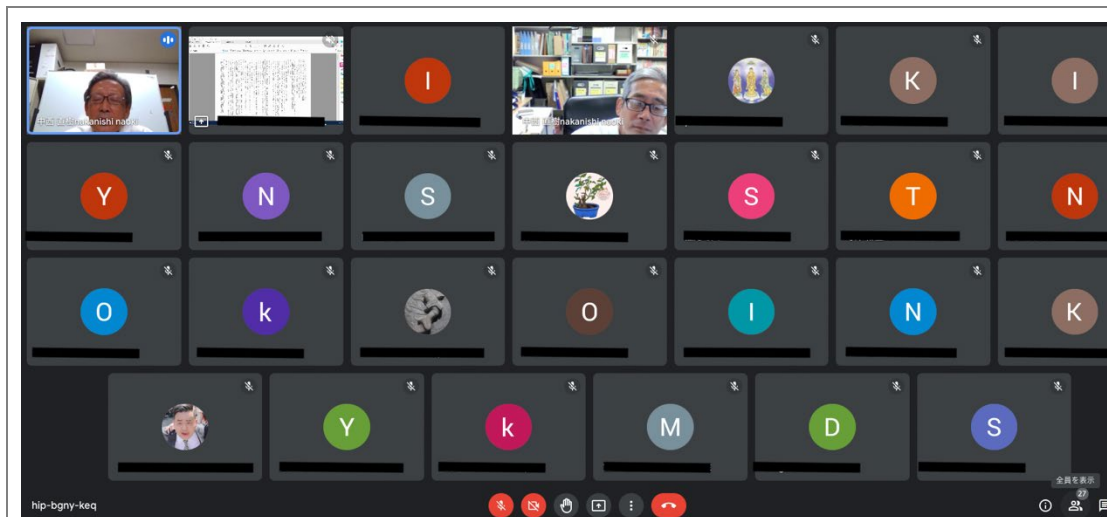
❖ 講演会・研究セミナー ❖

仏教史・真宗史研究班  
「近現代アジアにおける仏教の所在と社会的役割」

大谷光瑞の「仏教・真宗」論と社会的活動

2022年7月20日(水)13:30～15:00

オンライン開催 (Google Meet)



セミナーの様子

---

❖ 概 要 ❖

---

2022年7月20日（水）、常設研究班仏教史・真宗史研究班主催の研究プロジェクト「近現代アジアにおける仏教の所在と社会的役割」の一環として、赤松徹眞氏（本願寺史料研究所 所長、龍谷大学 名誉教授）を講師に招き研究セミナーが開催された。赤松氏は「大谷光瑞の「仏教・真宗」論と社会的活動」と題して研究報告を行った。大谷光瑞について、赤松氏は「大谷光瑞論（I）」（『龍谷史壇』第128号、2008・3）、「大谷光瑞の「満州国」論から「東亜共栄圏」論—大谷の仏教・真宗論の立場との関係—」（『仏教史研究』第58号、2020・7）などを執筆してきた。今回の報告はこれら研究の延長として位置付けられる。中西直樹氏（龍谷大学文学部教授）の司会の下、研究報告に続き、参加者全員での討論が行われた。

---

講演者：赤松 徹眞 氏（本願寺史料研究所 所長、龍谷大学 名誉教授）

---



赤松 氏

赤松氏は、まず年表をもって「大谷光瑞（第二十代鏡如）の教団継承と施策」を概観し、



取り分け、地方行政関係に関わる人々への対応について詳説した。次に光寿会の結成事情、またその「宣言」や規則、機関誌『大乘』の発刊などを取り上げ、「大谷光瑞の「仏教・真宗」論」について紹介した。大谷光瑞が著書の『見真大師』において仏教・真宗理解および本願寺教団のありようを厳しく指摘し、批判的言説を展開したとする。ついで、大谷光瑞の「社会的活動」として、光瑞会を組織して、日本・中国を含む国際状況や政治社会への認識・見解を講演などで明らかにして、政界・実業界・軍人などに影響力を及ぼしたことを論じた。最後に、「大谷光瑞の戦敗体験、社会的活動の破綻」において、敗戦後、産業復興を提唱する大谷光瑞の行動は、「平和日本の再建」を新たな俗諦として、「ただ仏法に生きるのみである」を真諦とする真俗二諦説の真宗理解に基づく社会的活動の性格が顕在化したものと推測する。

以上の四つの方面から、赤松氏は大谷光瑞の思想の歴史的な性格について検討した。

❖ 講演会・研究セミナー ❖

龍谷大学文学部  
宗教テキスト文化遺産アーカヴス研究基盤

「真宗と聖徳太子」展学術資源創成  
「龍谷蔵」バージョンアップ  
共同ワークショップ

2022年8月1日(月)～2日(火)

龍谷大学 大宮図書館2階コモンルーム／龍谷ミュージアム101 セミナールーム



8月1日(月)ワークショップ現場



## ❖ 概 要 ❖

2022年8月1（月）～2日（火）、世界仏教文化研究センター主催、古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センター、龍谷ミュージアム共催のワークショップが開かれた。

JSPS 科研費基盤研究（A）「宗教テキスト文化遺産アーカイヴス創成における相互理解知の共有」では、龍谷ミュージアムの企画展「真宗と聖徳太子」（2023年4月1日～5月21日）を研究計画の重点として全面的に協力、参画する各部局と研究者が連携し、展示資料選定ワークショップを開催した。

本活動に参加するメンバーは、A 科研の研究分担者と研究協力者として、龍谷大学世界仏教文化研究センター基礎研究部門プロジェクト「宗教テキスト文化遺産アーカイヴス研究基盤」（略称 RTHAPP）が支援する主たる学術研究基盤構築の事業となる。参加各位は、自身の研究課題や関心を持つ資料を自由に取り上げ、その一環として「真宗と聖徳太子」展に展示できる分を択び、データ化と共に、解題・解説（展示キャプション・図録解説等）を作成することを目指した。



8月1日（月）、龍谷蔵貴重書書庫見学

初日は、大宮図書館（2階コモンルーム）を会場として、担当者から「龍谷蔵」デジタルアーカイブのシステム高度化計画について説明を伺うとともに、その高度化に対応・促進する大宮図書館蔵書の「龍谷蔵」収録（解説・解題・全文データの付加）のための候補資料の選定を行った。

二日目は、龍谷ミュージアム 101 セミナールームを会場として、午前中から、「真宗と聖徳太子」展企画構想を石川知彦（副館長）・村松加奈子学芸員のレクチャーを受け、ディスカッションを行った。午後自由解散以降、村松学芸員の案内により、展覧会「あの世の美術」を観覧しつつ、「太子」展の展示をシミュレートした。2階会場では、デジタルアーカイブ研究センターのメンバーと共に、ハーバード美術館蔵南無仏太子像と本證寺絵伝のヴァーチャル（レプリカ）等の研究展示について合同検討をした。



8月2日（火）、研究展示向けの合同討議



❖ 共催事業・その他 ❖

龍谷大学世界仏教文化研究センター 国際ワークショップ

The Eighth Workshop on *Tannishō* Commentarial Materials

第8回『歎異抄』註釈ワークショップ

2022年8月6日(土)～8日(月)

於大谷大学



開催挨拶



---

---

❖ 概 要 ❖

---

---

2022年8月6日（土）～8日（月）にかけて、大谷大学を会場に第8回『歎異抄』ワークショップが開催された。本ワークショップは、学术交流協定を結ぶ大谷大学真宗総合研究所と米国カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所、龍谷大学世界仏教文化研究センターの三研究機関が主催するもので、今回で8回目となる。



進捗状況発表（深励班）

この度は円智『歎異抄私記』（1662年）・寿国『歎異抄可笑記』（1740年）・香月院深励『歎異抄講義』（1801～8年）という三つのテキストごとに班に分かれ、各註釈書の精読と議論を経た上で、原文の英訳作業が行われた。また開催中の二日目、そして最後の日に各班のリーダーが、それぞれのテキストの主なテーマを紹介し、翻訳の進捗状況について発表を行った。アメリカ・中国・日本などから多くの研究者が参集し、活発な議論が交わされた。なお次回のワークショップは2022年9月、カリフォルニア州バークレー市の浄土真宗センターを会場に行われる予定である。

<8月6日（土）>



- 
- 10:00-11:00 Introduction, Discussion on the Aims of the Workshop  
(開催挨拶、ワークショップの目的についての議論)  
ファシリテーター：Michael Conway (大谷大学講師)
- 11:00-12:00 Small Group Translation Session 1 (小グループ翻訳会議1)
- 3:00-14:30 Small Group Translation Session 2 (小グループ翻訳会議2)
- 14:50-17:00 Small Group Translation Session 3 (小グループ翻訳会議3)  
参加者：全員
- 

<8月7日(日)>

---

- 10:00-12:00 Small Group Translation Session 4 (小グループ翻訳会議4)
- 13:00-14:30 Presentation Session (各班の進捗状況発表)
- 14:50-17:00 Small Group Translation Session 5 (小グループ翻訳会議5)  
参加者：全員
- 



ディスカッション (円智班)

<8月8日(月)>



- 
- 10:00-12:00 Small Group Translation Session 6 (小グループ翻訳会議6)  
13:00-14:30 Small Group Translation Session 7 (小グループ翻訳会議7)  
14:50-17:00 Presentation of small group translations and plans for the next workshop  
(各班の進捗状況発表と次回ワークショップの案内)  
参加者：全員
- 



ディスカッション (寿国班)





❖ 講演会・研究セミナー ❖

古典籍資料総合研究班 古典籍資料研究プロジェクト  
「歌合の本質とその集積についての研究」

室町・戦国の武家と歌合

2022年9月22日(木)15:15～16:30

対面と Zoom ウェビナーによるハイフレックス開催



会場の様子



❖ 概 要 ❖

2022年9月22日（木）、古典籍資料総合研究班主催の古典籍資料研究プロジェクト「歌合の本質とその集積についての研究」の一環として、小川剛生氏（慶應義塾大学教授）を講師に招き、「室町・戦国の武家と歌合一為和判歌合をめぐる」と題する講演会が開催された。

講演者：小川 剛生 氏（慶應義塾大学 教授）



小川 氏

小川氏は、まず先行研究として、岩津資雄『歌合の歌論史研究』（早稲田大学出版会、1963）と伊藤敬「中世後期の歌合一再昌と終焉―」（『室町和歌史論』、新典社、2005）を取り上げ、和歌研究における「室町・戦国期の歌合への関心」を概説した。

ついで、「室町・戦国期の歌合の特徴」として、続歌（鎌倉中期から始まる当座歌会の方式）の寄書（よせがき）や、続歌をそのまま歌合に仕立てる「探題歌合」の仕組み、また

戦国期に武家歌人の間で自歌合（自作を左右に番える歌合）の流行や、歌道師範家（飛鳥井家・冷泉家）が歌合の判詞を書こうとしない事態を紹介したのち、今川氏のもとで行われた、冷泉為和（1486～1549）判歌合に注目を当てた。

為和は今川氏をはじめ、北条氏・武田氏などの武家に和歌を指導していた。為和には、詠歌二一三〇首（発句を含む）を収める自筆日次詠草（永正十三年（1516）正月から天文十七年（1548）四月まで、三十二年間にわたる）が現存するが、内容が日記に近く、詠歌とは直接関係ない、当時の政治・社会的事件、あるいは家族や所領についての記事が記される。一方、為和の駿府時代の遺産として、現地で行われた歌合の自筆写本がある。いずれも、為和のもとに到来した寄書を写して、余白に判詞を書き込んだ、加判のための草稿である。全て紙背文書を持ち、I～VIの六冊、計十二種の歌合を収める。今川氏の文藝を研究する上で新資料にあたるが、冷泉家時雨亭叢書 50『為広・為和歌合集』で影印刊行されたものの、あまり活用されていない。

そこで、小川氏は為和判歌合における歌病（和歌の修辞上の欠陥を病になぞらえたもの）を取り上げ考察した。為和は判詞において、いわゆる四病（同心・乱思・爛蝶・渚鴻）八病（花橘・老楓・中飽・後悔・岸樹・風燭・浪船・落花）を真剣に指摘し、病があれば「歌がら」が優れていても勝としない。ただし、乱思・爛蝶・渚鴻などは、『八雲御抄』などの定義とは違い、あくまで同字病として適用している。どうやら、為和は『悦目抄』の説（『和歌大綱』にも同じ）に基づいているらしい。しかしそもそも、素人に近い武家歌人にどうして厳格に適用したのか、疑問がのこる。また、歌人たちが通常の会作として詠んだ歌に対して、主催者が法楽歌合とすることを企画し、為和に判を依頼した際、為和は法楽であることを重視して、ふだん問題にしない歌病をいちいち指摘する事例も紹介した。

最後に、為和判歌合の成立について考察を加えた。歌合草稿は義元の代、為和の晩年のもので、I～VIの順にまとめられた。そしてIからIIIは（最終的には）法楽歌合とされ、IVはそれ以外ということになる。ともに草稿ながら、書型の違い（I～IIIは大本、IVは横本）は、意識の差を反映したものと推測できるという。

❖ 講演会 ❖

講演会

掇化する浄土—真仏土と方便化身土との二重性—

2022年10月7日（金）13:30～15:00  
龍谷大学大宮学舎 清和館3階ホール





---

---

❖ 概 要 ❖

---

---

2022年10月7日(金)、大谷大学名誉教授の加来雄之氏をお招きし、「撰化する浄土—真仏土と方便化身土の二重性—」をテーマにご講演をいただいた。

はじめに氏は、「従如来生」をキーワードとして、真宗学という学問は、如来を中心として受け止めていくことが重要であると指摘し、釈尊が悟った内実は「如来」であり、「如来」の中で人生を生き抜いた者が釈尊であると語られた。

---

講演者： 加来 雄之 氏 (大谷大学 名誉教授)

---



加来 氏

親鸞は釈尊の悟った「如来」を、『無量寿経』によって「従如来生」と受け止めた。浄土真宗の教相の根源には従如来生があり、これを明らかにしたものが教行信証、浄土真宗であるという。「従如来生」を根本回向と位置づけ、それを衆生が受け止める時、往相と還相という二種の回向が課題として現れるのである。その時に基礎となるものが浄土である。一般に浄土とは、真宗の中では、衆生が往く場、そしてその場から還ってくると捉えられている。加来氏は従来の解釈を衆生の現実として肯定しつつ、一方で、如来のはたらきの



中で、現実に私が生きるとはどういうことかという問題に立ち、還相、真仏土、化身土を読み解くと、新たな風景が立ち上がってくるのではないかと述べた。具体的には、「証書類」にある「然れば弥陀如来は如従り来生して、報・応・化種々の身を示し現したまふなり」の文をいかに解釈するのかという問題である。ここで「摂化浄土」という風景が明らかになってくる。

『無量寿経』の説かれる往生には、命終を契機とするものと、命終を契機としてないものが説かれている。氏は前者を衆生から浄土へ向かうことによる生まれを説いており、後者は浄土が衆生を包摂することによって生まれを説くという。『岩波仏教辞典』の「浄土」には、「往く浄土」「成る浄土」「在る浄土」が説明されているが、武内義範は「将来する浄土」という概念を提示した。加来氏は武内の概念をさらに進め、他力の教えにおける浄土、つまり親鸞の仏身仏土の理解は、「包摂する浄土」もしくは「摂化する浄土」であると指摘した。厳密には「従如来生」の願海酬報を本質とし、「従如来生」の報応化身による摂化（摂取と教化）をはたらきとする浄土である。



杉岡 氏（司会）

続いて、「従如来生」の解釈をめぐる一つの流れとして相伝教学が紹介された。相伝教学は、本願寺歴代が口伝したものであるが、現在は表舞台から姿を消している。その特徴は往相回向、還相回向は一つの如来のはたらきの二面性であって、衆生が命終後、浄土から



還ってくることはないとするものである。大谷派では香月院深励、本願寺派では等心院興隆などが相伝教学を厳しく批判している。加来氏も相伝教学を肯定する立場には立っていないが、「従如来生」を考える上で大きく示唆を受けたという。

❖ 講演会・研究セミナー ❖

コロキウム

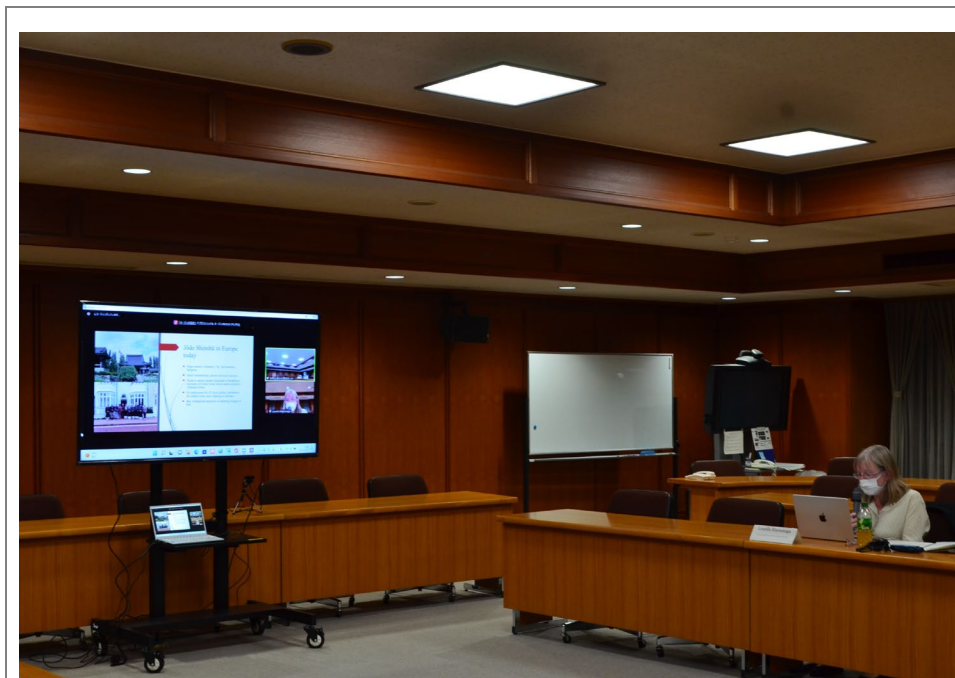
**Soundscapes of the Pure Land?**

**Music, authenticity, and identity in globalizing Jōdo Shinshū**

(浄土のサウンドスケープ?—グローバル化する浄土真宗における音楽、オーセンティシティおよびアイデンティティについて—)

2022年10月21日(金)17:00~18:30

龍谷大学 西翼2階大会議室/オンライン開催 (Zoom)



会場の様子





❖ 概 要 ❖

2022年10月21日（金）、今年度第2回龍谷大学世界仏教文化研究センターコロキウム「Soundscapes of the Pure Land? Music, authenticity, and identity in globalizing Jōdo Shinshū（浄土のサウンドスケープ？ーグローバル化する浄土真宗における音楽、オーセンティシティおよびアイデンティティについてー」が開催された。本コロキウムでは Louella Matsunaga（ルエラ・マツナガ）氏（オックスフォード・ブルックス大学）による講演が行われた。司会・進行は、本学教授の那須英勝氏が担当した。

講演者：Louella Matsunaga 氏（オックスフォード・ブルックス大学）



Louella Matsunaga 氏

Matsunaga 氏（以下「マツナガ氏」と表記）は、浄土真宗の音楽的儀礼の世界的な展開と受容について調査するために、世界仏教文化研究センターの客員研究員として龍谷大学に滞在している。今回の講演では、19世紀後半以後、浄土真宗の音楽的な宗教儀礼（声明、読経など）の実践がいかんにして海外に伝播し、その過程でどのように独自な変容を遂げた

のか、日本、ハワイとアメリカ、そしてヨーロッパの事例を中心に紹介した。マツナガ氏によれば、こうした宗教的な儀礼の国際的な展開は、近年において活発に議論されてきたグローバル化の問題を理解するためにも重要な手掛りになり得る。

日本仏教は、明治維新後に特定の地域的な宗教ではなく、世界的な宗教として捉えなおされていく。19 世紀後半になると、日本からの移民がハワイをはじめ、アメリカ大陸に移住し、それによって浄土真宗もはじめて西洋に伝わった。海外に伝播した浄土真宗は、世界のそれぞれの地域にある既存の文化の影響で変容を遂げることになる。ただ、ここで注意すべきは、浄土真宗の儀礼における音楽的プラクティスの変化が、海外のみならず、日本国内でも起こっていたことである。マツナガ氏は、日本、ハワイとアメリカ、ヨーロッパからの具体的な事例を提示しながら、これらの地域における浄土真宗の儀礼的な音楽がどのように独自の展開を見せたのかについて詳しく紹介した。



那須 氏（司会）

明治期以後、「時代に合わせる」といった要求に応えようとして、浄土真宗でも「声明」「読経」「仏教音楽」など儀礼音楽に変容が強いられた。天台宗の伝統に遡る真宗声明の儀礼は、それまで口頭で伝授されてきたが、1857 年に西洋風の楽譜が追加され、詠唱の方法も体系化された形で出版されるようになる。明治期になると、社会の近代化とともに西洋風の仏教音楽も導入されるようになった。1912 年に本願寺により洋式の楽曲が収録された楽譜も刊行され、その 5 年後に大阪の本願寺津村別院ではじめての音楽法要が行われてい

る。また、できるだけ多くの僧侶が無理なく声明を唱えられるようにと、勝如上人（第23代宗主、1911～2002年）により声明のさらなる簡略化も試みられている。近年では、本山である本願寺を含むいくつかの大きなお寺では、洋楽の様相を取り入れた仏教讃歌が行われているところもあるが、「声明」と「読経」が用いられることの方が圧倒的に多い。この数年の事例から言えば、朝倉行宣師による「テクノ法要」や Ta2mi 氏のように、新しい仏教音楽への挑戦も行われている。

他方、アメリカにおける浄土真宗は、1890年代に日系人の移住とともにハワイとカリフォルニア州地方を中心に伝播していったが、この頃日系人に対する差別が強く、結果として、仏教儀礼はキリスト教に合わせるような形への変更が余儀なくされた。例えば、アメリカの仏教界でも、キリスト教のように日曜礼拝が開始され、次第に賛美歌に似た楽曲も導入された。1920年代の初めにハワイで刊行された浄土真宗の出版物を確認してみると、「Amida」の代わりに「Lord」という言葉が頻繁に利用されることなど、キリスト教的な語彙の借用の影響が確認できる。さらに、キリスト教の音楽と類似する英語での経典・偈頌の翻訳も試みられ、特に北アメリカやハワイ地方の真宗の儀礼では一定の人気を集めた。実際、こうした英語の翻訳で経典・偈頌を唱えることは、アメリカ日系人のアイデンティティの一部として現代まで伝わってきたことに注目すべきである。また、より多くの信者を獲得するために、浄土真宗というよりも、むしろ一般的な仏教信者としてのアイデンティティ形成に力が入れたこともあったようだ。近年においては、アメリカでは日本のように読経する傾向も強いが、ハワイでは英語での読経もしばしば行われているようだ。また日曜礼拝などにおいても、パーリ語の vandana（帰敬偈）や ti-sarana（三帰依）も唱えられ、パーリ語と英語を併用して儀礼を行う例も少なくない。

浄土真宗は19世紀の後半にはじめてヨーロッパに紹介された。これは、よく知られていることであるが、本願寺は数回にわたってヨーロッパへ学僧を派遣している。ヨーロッパにおける最初の報恩講は、1891年にフランス・パリのギメ博物館で行われ、赤松連城（1841－1919）のようにヨーロッパで仏教伝道活動を行った人物もいる。しかしながらこうした活動は、浄土真宗に特化した伝道というよりも、どちらかという一般的な仏教としての紹介に限られていたようだ。仏教がはじめて西洋世界で広く注目された1893年のシカゴ万国宗教会議でも、テーラワーダ仏教が中心であり、浄土真宗が仏教本来の宗派であるかについて議論さえあった。ヨーロッパは、アメリカと違って日系人は少なく、第二次世界大戦後まで浄土真宗の伝道活動はほとんど確認できないと言って良い。少なくとも文献上、1954年に勝如上人がドイツを訪問した時に、Harry Pieper氏（1907～1978年）が浄土真宗へ改宗

したのがはじめての事例である。しかしその後、浄土真宗はイギリス、ベルギー、オーストリアなど国々へ普及することになる。現在では、ドイツ、イギリス、スイス、ベルギーでは特に浄土真宗の信者が多いが、これらの国々ではアメリカ式の真宗の儀礼ではなく、むしろ日本と同じ読経が人気である。しかし、パーリ語の礼拝や三帰依を唱える場合もある。

上記のように、浄土真宗における音楽的儀礼の国際的な展開を見れば分かるように、グローバル化は、必ずしも特定の中心から周縁地へ伝播する現象ではない。日本、アメリカ・ハワイ、ヨーロッパの事例から考えれば、浄土真宗の中心である日本でも、仏教音楽が様々な形で変容したことが確認できるし、同じように日本から世界各地に伝播した浄土真宗の儀礼音楽も、それぞれの地域でさらに独自の発展を見せた。こうした仏教音楽の視点から考えてみると、従来のグローバル化論では前提とされた、西洋と日本といった二項対立的な捉え方も成り立たなくなるのではないだろうか。

❖ 研究セミナー ❖

研究セミナー

新国訳大蔵経『無量寿経論』担当の思い出

2022年11月25日(金)15:15~16:45

龍谷大学大宮学舎 北齋 204 教室



会場の様子

---

❖ 概 要 ❖

---

11月25日（金）、基礎研究特定公募研究「真宗聖教の文献学的研究」において、仏典翻訳家・宗教評論家の大竹晋氏を講師として招き、「新国訳大蔵経『無量寿経論』担当の思い出」をテーマに研究セミナーを開催した。本セミナーは「真宗聖教の文献学的研究」が『無量寿経論』の訳注の作成を目指していることから、菩提流支訳経論研究の第一人者であり、既に『無量寿経論』の国訳を発表している大竹氏から、『無量寿経論』の特徴について助言を得ることが目的の1つであった。以下、大竹氏の報告を要約する。

---

講演者：大竹 晋 氏（宗教評論家、仏典翻訳家）

---



大竹 氏

大竹氏は、筑波大学及び大学院生時代、竹村牧男氏に師事したこと、研究に接した経験と話しながら、『金剛仙論』Ⅰ・Ⅱ（竹村牧男と共訳）をはじめとし、『十地経論』『無量寿経論』などの新国訳大蔵経の釈経論（インド撰述の経典に対する注釈書）部の国訳を担当するに至った経緯を述べられた。そのきっかけの一つは、師の竹村氏の『大乘起信論読釈』





を読んだことであった。『大乘起信論』は、明治時代からインド撰述か中国撰述かという成立問題をめぐり、議論があった。竹村氏は『大乘起信論』の思想や語法が菩提流支周辺の思想や語法と一致することを指摘し、『大乘起信論』成立問題の解決へ突破口を開かれた。師の影響を受けた大竹氏は、『無量寿経論』『十地経論』の漢訳者である菩提流支に関心を持ち、それがこれらの仏典の国訳に取り組む原動力になったと振り返られた。

この度の研究セミナーの題目にもある『無量寿経論』の解説を通して、大竹氏は新たな知見を提示された。それは『無量寿経論』が「別時意趣」説に基づいて書かれているという見解である。インドの唯識学派においては、『無量寿経』は阿弥陀仏を念ずる凡夫が臨終の直後に極楽世界へ転生することができると思趣しているのではなく、念仏する凡夫が臨終から幾度も輪廻転生を繰り返して修行し、聖者となった別の時に極楽世界へ転生することができると思趣していると説く。これが別時意趣である。大竹氏のこの見解には賛否両論があったことに触れられた。

さらに、大竹氏は大学に就職せず、筆一本で生きる道を選んだ経緯を述べられた。担当した新国訳大蔵経の出版に伴い、自分には直観力、発想力、表現力、創造力があることに気付かれた。そして、経済的な安定を追求することよりも、執筆する中で蓄積されていった種々のアイデアを実現するため、多くの書籍を執筆することを目指すようになった。



しかし、筆一本で生きる道を決めたものの、出版社の経営難などによって書籍の出版ができない時期があり、また人間関係の問題から体調を崩すこともあって一度はその生きる道を締めかけたこともあった。幸いにも、国書刊行会などのさまざまな出版社との仕事を通して、筆一本で生きる道を歩めたという。

大竹氏は、この十数年の間に研究環境が飛躍的に便利になったことにも触れられた。今では、デジタル化された梵語仏典、パーリ語仏典、漢訳仏典などが多数公開されて、SAT『大正新脩大藏経』テキストデータベースのように便利な検索機能も充実している。しかし、大竹氏は新国訳を担当しはじめた頃は、仏教典籍のデータベースは整っておらず、デジタル化された世親の梵語著作もほとんどなかったという。さらに西藏（チベット）語仏典を日本語訳する際、辞書にない用語があり、苦心した経験も話された。研究環境が便利になった今、大竹氏は『菩提流支の研究』『成唯識論の研究』などの新たな書籍の執筆に意欲を燃やされている。

最後に、現在の研究や学界の状況に鑑み、若手研究者に向けて助言された。たとえば、先学に対して敬意を払って研究することの大切さ、自身の能力や才能に気づくことの重要性、大学に就職するだけが研究者の道ではないことなどを述べられた。以上のような若手研究者への激励を述べられ、講演を締めくくられた。



記念写真





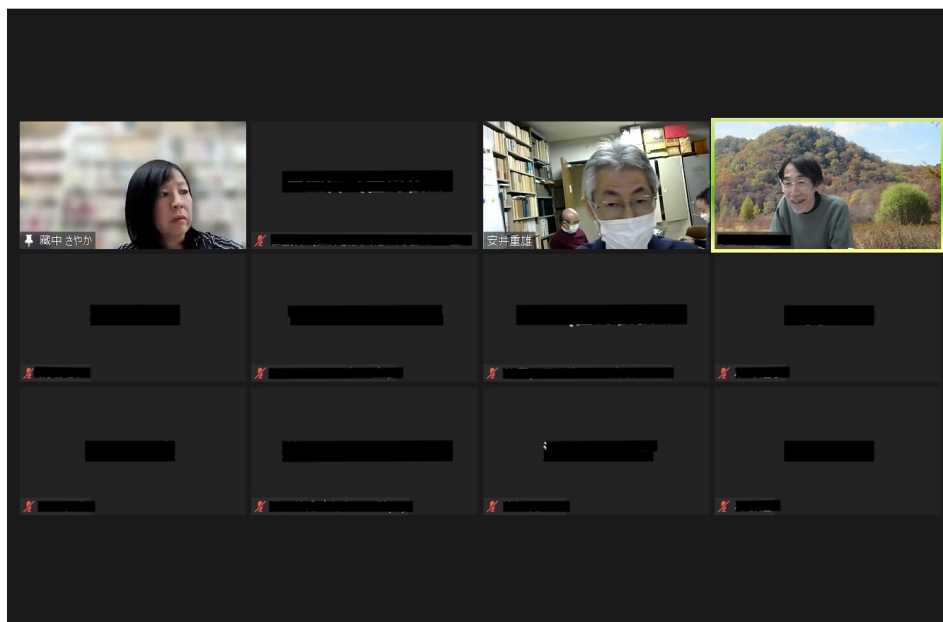
❖ 講演会・研究セミナー ❖

古典籍資料総合研究班 古典籍資料研究プロジェクト  
「歌合の本質とその集積についての研究」

『和歌一字抄』の歌合歌  
治承二年廿二番歌合をめぐる

2022年12月4日(日)15:00～18:00

オンライン開催 (Zoom)



オンライン研究会

---

---

❖ 概 要 ❖

---

---

2022年12月4日（日）、古典籍資料総合研究班主催の古典籍資料研究プロジェクト「歌合の本質とその集積についての研究」の一環として、藏中さやか氏（神戸女学院大学教授）と中村文氏（日本女子大学非常勤講師）を講師に招き研究集会が開催された。藏中氏は『和歌一字抄』の歌合歌」、中村氏は「治承二年廿二番歌合をめぐる」と題して研究報告を行った。安井重雄氏（龍谷大学文学部教授）の司会の下、両氏の報告に続き、参加者全員での討論が行われた。

---

講演者： 藏中 さやか 氏（神戸女学院大学 教授）

---



藏中氏は、『和歌一字抄』を取り上げその中に歌合を出典とする和歌がどれほど、またどのように組み込まれているのかを、『袋草紙』や『夫木和歌抄』との関係を視野に入れつつ議論を展開した。また、藤原清輔（1104～1177）著作を貫き支えた歌合資料の性格はどのようなものであったのか、『和歌一字抄』はどのように編纂されたものであったのか、報告の

中では歌合資料がいかに使われたかという視点から、明らかに歌合資料から採録したと考えられる和歌を指摘することによって考察を加えた。主として『和歌一字抄』の内部の問題、『袋草紙』『夫木和歌抄』との関係、歌合本文との異同に着目しながら、個々の事例について概観した後、歌合歌は標目によって構成する『和歌一字抄』を支える重要資料であると指摘した。『和歌一字抄』の標目は歌合の歌題によって立てられている場合があり、その編纂は歌題中の「一字」を重視したものである。『袋草紙』採録歌と必ずしも重ならないのは、歌題中の標目に掲げる一字と和歌表現との関係に着目し採歌したためと推測できる。また『和歌一字抄』で用いられた歌合資料は清輔の手元にあったと考えられるが、『夫木和歌抄』には残っていない場合もある。総じて、中世において、『和歌一字抄』がそれなり評価されていたのは、清輔の手になるものと認識されていたことに関係があるという。

講演者：中村 文 氏（日本女子大学 非常勤講師）



安井 氏（司会）、中村 氏

中村氏は、まず治承二年廿二番歌合の概要を紹介し、ついで出詠者をそれぞれ洗い直すことによって、当歌合のあり方や特色について考察を行った。出詠者には後白河院近臣が多く含まれる点が注目すべきである。廿二番歌合は、藤原頼輔（1112～1186）を頭目にただく院近臣グループを左方に配し、石清水祠官および源有房（生没年不詳）につながる人々を右方に配するという趣向で構成されたのではないかと推測した。そして、キーとなった

人物は、院近臣と石清水祠官家の双方に深い関わりを持っていた有房で、有房の企画のもと、藤原親盛など院近臣の主要歌人が周囲に声をかけてこの催しが成り立ったとする。当歌合は、歌壇の主流とは離れたところに、後白河院近臣を中心とする別の和歌の場が脈々と存在し続けていた。新古今時代に入って、道清が正治二年石清水若宮歌合を決行し、さらにそれを受け継ぐように、建仁元年石清水社歌合、および元久元年十月石清水若宮歌合が行われていることは、歌壇の主流から離れた場で催行された歌合が新古今時代まで影響を及ぼした可能性を想定されるという。



❖ 講演会 ❖

講演会

**Neutralizing the Insider Threat:  
The Madhyamaka Assimilation of the Three-Nature Theory**

(仏教内部からの脅威を無効にする—三性説の中観派的同化—)

2022年12月8日(木)15:15~16:45

龍谷大学大宮学舎 西翼2階大会議室



会場の様子

---

❖ 概 要 ❖

---

12月8日(木)、大蔵経総合研究班において、オーストリア科学アカデミーの Anne MacDonald (アン・マクドナルド) 博士を講師として招き、「仏教内部からの脅威を無効にする—三性説の中観派的同化—」をテーマに講演会を開催した。以下、アン・マクドナルド博士の講演内容を要約する。

【和訳要旨】

6世紀から7世紀のインド仏教界では、瑜伽行派の存在論と認識論の教義及びその論理的な枠組みと規則が共に、中観派にとって深刻な挑戦となった。そして、中観派を代表する学匠である清弁(バーヴィヴェーカ)と月称(チャンドラキールティ)が瑜伽行派による批判に対して、瑜伽行派の唯識思想が持つ欠点を明らかにし、中観派への脅威を無効にするための論証を展開していた。本講演では、瑜伽行派と対峙した上記中観派の二師が展開した独特な論証方法を検証し、その問題意識に焦点をあてつつ比較検討を行う。月称の論点を理解する上で、重要な役割を果たすのは、彼の著書『入中論』及びその自註である。従来はチベット語訳しか知られなかったが、現在は梵語写本を参照することができ、月称の議論をさらに深めることができる。

---

講演者： Anne MacDonald 氏 (オーストリア科学アカデミー)

---



Anne MacDonald 氏



講演のメインテーマは、中期中観派を代表する学匠である月称と清弁が、同じく仏教徒である瑜伽行唯識派からの批判に対してどのように対処したかを詳細に検討した上で、最終的には瑜伽行派の代表的な学説である「三性説」を『入中論』の中で月称が中観派の視点からどのように解説したかが明らかにされた。

冒頭で、『瑜伽師地論 菩薩地』「真実義品」の「概念や言葉の基盤としての *vastumātra* の存在を認めるべし」という一節が取り上げられ、それは全ての存在を否定する「虚無論」を否定するが、完成された唯識思想のように全ては心の現れであるという「幻影論」でもない、「唯名論」とでも言うべき中間的立場に立っていることが指摘された。

これに対して、清弁は『中観心論』第5章第82-83偈で、上記の「真実義品」の記述を発達した瑜伽行派の唯識思想と理解した上で、瑜伽行派が中観派を虚無論と捉えて批判したものと捉えて、反論している。清弁と同時代の瑜伽行派の護法は、中観派の『四百論』に対する注釈で「空性の直証は虚妄分別の束縛を打破する」と説明するが、同様の記述が月称の『四百論注』にも見られることが着目される。一方、清弁は『掌珍論』で護法もしくは陳那を批判しているとされる。このように6-7世紀のインド仏教界では、中観派と瑜伽行派の間で議論の応酬があり、中観派は一種の「脅威」を感じていたと想像される。



記念写真

ここで、清弁は例えば『中観心論』第5章第1偈で、「瑜伽行派」という名称を用いているのに対して、月称は『入中論』で「識論者」「アーラヤ識論者」などの名称を用いるが、「瑜伽行派」という名称は用いないのが注目される。瑜伽行派と対峙するとき、清弁と月称は同じ見解を表明するのが見られる。例えば、両者は『十地経』の「一切は唯心」という言明を「十二縁起」の文脈で理解すべきだと述べている。一方、共に「三性説」を否定するが、清弁は「円成実性」、月称は「依他起性」の批判に重点をおいているという違いも見られる。

これは、『入中論』の蔵訳からの優れた仏訳者であったドゥ・ラ・ヴァレ・プサーンも気づかなかった点であるが、同書の梵語写本の発見によって、月称が陳那の『集量論』第1章第12偈を引用して批判していることが明らかになった。

最後に、三性説について、月称は、「依他において、自性が作られたものとして遍計されるが、自性は作られたものではない。縁起し、作られ、影像のようなものが認識されるとき、遍計される自性も、仏智の領域においては真実である。作られたものに触れることなく、純粋な自性 (kevala-svabhāva) を直証するから、まさにそれを覚るから、「仏」(目覚めたもの) と呼ばれるのである」と三性説を中観派の視点から解釈している。

ここに「純粋な自性」と言われるのは、『明句論』で「勝義の自性」と呼ばれるものに相当し、月称が否定の対象とされる「自性」とは別に「空性」を対象とする一種の「神秘的な智」(グノーシス)、神秘的経験を認めていたことが窺われる。これは、清弁が「認識しないことによって、勝義は知られる」というのと対比されるであろう。





❖ 研究セミナー ❖

研究セミナー

『考信録』七巻本の成立過程について

2023年1月26日(木)17:30~18:30

龍谷大学大宮学舎 西翼2階大会議室



ディスカッション



❖ 概 要 ❖

1月26日（木）、親鸞浄土教総合研究班「真宗学研究プロジェクト」において、世界仏教文化研究センター嘱託研究員の西村慶哉氏を招き、「『考信録』七巻本の成立過程について」の研究セミナーを開催した。

本プロジェクトは、江戸中期の浄土真宗の学僧である玄智が撰述した、「浄土真宗の百科事典」と称される『考信録』の研究に取り組んでいる。今回、西村氏は現存している『考信録』の諸本、特に七巻本の成立過程についての知見を述べた。以下、西村氏の報告を要約する。

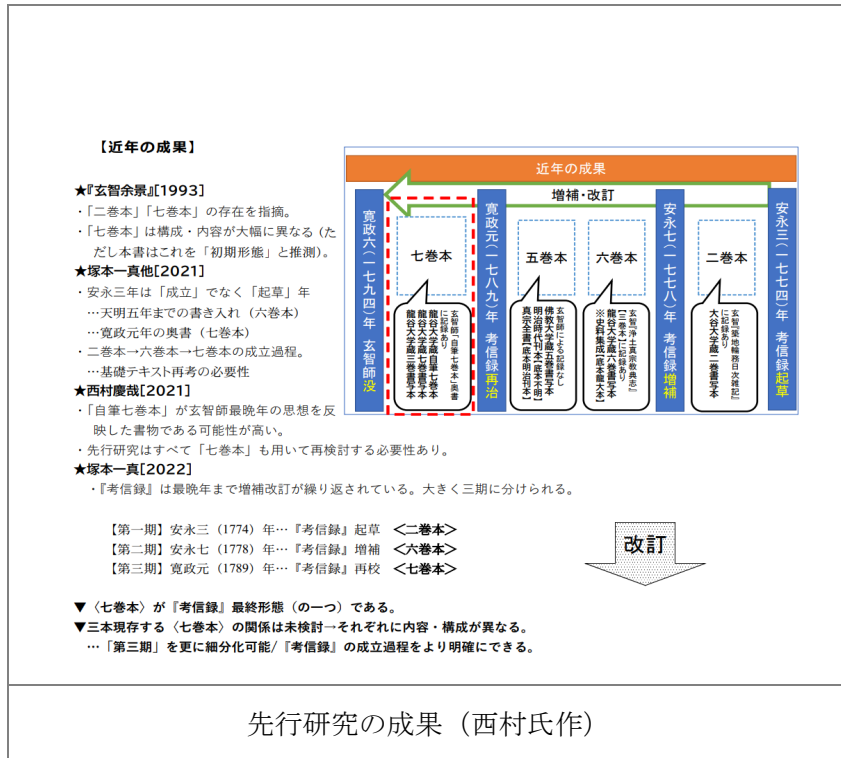
講演者：西村 慶哉 氏（龍谷大学世界仏教文化研センター嘱託研究員）



西村 氏

従来、玄智や『考信録』に関する研究は、安永三年（1774）に成立した『考信録』の五巻本・六巻本を対象として多数の成果が公開されてきた。ただし、諸本の成立時期や成立過程をめぐっては、いまだ十分に解明されてこなかった。そこで『考信録』の諸本を整理してみると、現存している『考信録』の諸本には、おおよそ二巻本、六巻本、七巻本の三

系統が確認できるという。また、『考信録』は玄智の最晩年まで増補改訂が繰り返されており、大きく三期に分けられるという指摘もある。即ち、安永三年（1774）に『考信録』二巻本を起草し、そして安永七年（1778）に六巻本までを増補し、最後に寛政元年（1789）に七巻本として再校したという流れである。西村氏は、七巻本系統の3本の関係に着目し、第三期とされる『考信録』の成立過程をより明確化することを試みた。



西村氏は、龍谷大学図書館所蔵の3点、いわゆる①玄智自筆の七巻本、②七巻書写本、③三巻書写本（もとは七巻本）について精査し、それぞれの関係性を整理した。

まず、②七巻書写本と③三巻書写本の異同については、基本的な内容と構成は同じであるが、巻一・巻二の目次が異なっていることが注目される。特に③三巻書写本に比べ、②七巻書写本の目次項目が減少・整理したことが重要である。これによって、原本の重複項目を削除した後、③三巻書写本から②七巻書写本へと展開した可能性、または原本をそのまま書写した三巻本と重複項目を整理削減した七巻書写本が同時に成立した可能性という、二つが推定できる。

次に、自筆七巻本の改訂時期について検討された。西村氏は、七巻本における目録及び年紀、本文の異同を調べる限り、『考信録』七巻本の成立順序を以下のように提示する。それは、六巻本から自筆七巻本の再校へ、そして三巻書写本と七巻書写本が写されて、最後

の自筆七巻本の改訂の結果、現在の形態となるということである。

最後に、『考信録』が改訂され続けた理由について言及した。西村氏は、玄智をとりまく本願寺の状況の変化、玄智自身の思想的変遷、及び新資料の入手などの諸要素があったと考えている。その一例として、六巻本の巻一に存在したものの、後に削除された「領解文」という項目に注目した。天明四年（1784）「領解文」を新刻するにあたり、玄智は「領解文」の文言は光善寺本が最も整っていると勧めている。しかし、実際に新刻されたのは、光善寺本とは相違するもので、その内容にも玄智は教学的不審感を抱いて、再度光善寺本を勧めたが、訂正はされなかった。その後天明七年（1787）の頃、能化巧存の請いにより新刻「領解文」が弘通されるようになった。その結果、寛政元年（1789）以後、玄智は『考信録』より「領解文」の項目を削除したと考察している。

上掲した内容を踏まえ、西村氏と参加者の間で活発な議論が行われた。そこでは、『考信録』以外の玄智著作との比較研究の必要性を提示され、『考信録』の内容と玄智の思想変遷や当時の教団内部の問題点などの解明が今後の課題と位置づけられた。そして、改めて『考信録』の自筆本を始めとした諸本を比較検討する意義の大きさが確認された。



❖ 研究セミナー ❖

研究セミナー

浄土教礼讃偈の律動

2023年2月16日(木)13:30~15:00  
龍谷大学大宮学舎 西翼2階大会議室



会場の様子

---

---

❖ 概 要 ❖

---

---

2月16日(木)、世界仏教文化研究センター基礎研究部門特定公募研究「真宗聖教の文献学的研究」において、佛教大学教授齊藤隆信氏を招き、「浄土教礼讃偈の律動」をテーマとした研究セミナーを開催した。

---

講演者：齊藤 隆信 氏 (佛教大学教授)

---



齊藤氏は、善導の礼讃偈を研究する際に、文学作品と同じように音数律・声律・韻律という韻文の三要素を導入した結果、善導の礼讃偈の大部分と法照の礼讃偈は「宗教作品の偈」としてのみではなく、「文学作品の詩」として再評価すべきであると提唱する。以下、齊藤氏の報告を要約する。

まず、齊藤氏は韻文の三要素について説明した。音節数(句中の字数)によって規定された形式を有する詩歌や散文の音楽的なリズムである。声律はいわゆる句中の平仄(平声・上声・去声・入声)である。中国語は声調があることにより、楽曲的なメロディーにのせずとも、文章を朗読するだけで一定の旋律が得られる。韻律は、同じ韻母を偶数句末に配置することで、いわゆる押韻となる。



次に、齊藤氏は善導以前の浄土教礼讃偈について検討した。例えば、世親『往生論』の願生偈が五言、曇鸞『讃阿弥陀仏偈』では七言と、音数律は揃っているが、声律（平仄）と音律（押韻）が欠如している。ただし、声律と音律の配慮にまったくなされていないため、『往生論』や『讃阿弥陀仏偈』は中華の詩歌としての音楽性と文学性は希薄となり、大衆参加型の儀礼としては十分なものとなりえなかった。



佐々木氏（司会）、内田氏（コメンテーター）

そこで、善導は旋律豊かな『観経疏』『往生礼讃偈』『法事讃』が作ったのであろうと推測される。このような善導作の礼讃偈の韻律について分析してみると、音数律として七言を採用していること、声律として句中の平仄が意図的に配置されていること、韻律として偶数句末におけるやや通俗的な押韻がなされていることが明らかされた。要するに、善導は大衆儀礼に合う礼讃偈を作成するため、律動の通俗的な諸要素を考慮しながら、当時の人々の嗜好に合わせて多数の七言礼讃偈を作成したと、齊藤氏は指摘する。したがって、善導の作品によって中国浄土教の礼讃儀礼における歴史的・記念碑的な改革が行われていたといえる。それだけではなく、善導以後の浄土教の儀礼における懺悔と讃嘆は信仰表現と表裏一体の関係で、脆弱無力で罪深い存在としての自己に対する絶望（懺悔・信機）と、自己をはるかに超越した救済者の存在に対する畏敬（讃嘆・信法）とが一体になっている。静的教理（信機・信法）による理解を、動的な儀礼（懺悔・讃嘆）によって体感できる仕組みができあがっていたことは注目に値する、と齊藤氏は評価している。

最後に、齊藤氏は善導の作風を継承した法照の『五会念仏法事讃』等へも検討を加えた。五会念仏は、単調になりがちな口称念仏を、儀礼用に緩急と高低の変化を加えた音楽的な唱法である。ゆえに、善導の礼讃偈に比べより文学的な作品となる上、漢字音の地域性や



口語表現と和讃の多用性等の特色がみられる。

上掲した齊藤氏の報告を受けて、齊藤氏と参加者の中で活発な議論が交わされた。議論は、「仏典における宗教性と文学性の問題」、「浄土教における礼讃儀礼の位置付け」、「『浄土論』願生偈の文体について」など多岐にわたった。その議論の内容からも、齊藤氏による浄土教礼讃偈研究の意義の大きさが確認されることとなった。







❖ 講演会・研究セミナー ❖

基礎研究部門 特定公募研究  
「大瀛『横超直道金剛鉢』の研究」(研究代表：殿内恒)

越中の三業惑乱と妙好人

2023年2月16日(木)17:00～18:30  
龍谷大学大宮学舎 北齋106教室



会場の様子

---

---

❖ 概 要 ❖

---

---

2023年2月16日、基礎研究部門特別公募研究「大瀛『横超直道金剛鉢』の研究」（研究代表：殿内恒）主催、森越博氏（氷見市立図書館元館長）による「越中の三業惑乱と妙好人」と題する学術講演会が開催された。

---

講演者： 森越 博 氏（氷見市立図書館 元館長）

---



森越氏は、「尺伸堂と越中の学塾」「越中の三業惑乱」「三業帰命説と妙好人」の三部に分けて論を展開した。まず、越中の学塾について、尺伸堂（尺伸堂学派・西光寺）の門弟たちの活動を中心に、あわせて大心海（大心海派・円満寺）や空華廬（空華学派・善巧寺）にも言及しながら、「学国」越中の全体像を俯瞰した。ついで、三業惑乱の概要を説明し、当時越中における僧侶の動向を紹介した。三業惑乱は宝暦十二年（1762）に、功存が「無帰命安心」を抑えるため福井御坊へ赴いて、主唱者の浄願寺龍養を糾明したことに端を発

し、その後単なる教義論争に止まらず、各地の門徒を巻き込み、流血の大騒動に発展した。文化三年（1806）に、寺社奉行は三業帰命説を異安心とし、西本願寺門主・本如もこれを追認して、「御裁断御書」を發布し、ようやく事態は收拾したという。そして、本山が三業惑乱で混乱をきわめたあと、地方篤信者によって正信の範（正しい信心のあり方）を示し、教団の混乱や中央学林・学場などの動揺に対応しようとして、『妙好人伝』が刊行された。森越氏は、妙好人が三業惑乱に対し正信を示した挿話三点、越中能与女（第四篇下）・奥州とく女（第四篇下）・和州五郎右衛門（第五篇下）の事例を紹介してから、『妙好人伝』以降の代表的な妙好人として、讃岐の庄松や浅原才市の事例を取り上げ、妙好人の三業帰命説への受け止め方について考察を行い、報告を締めくくった。



記念写真



❖ 講演会・研究セミナー ❖

古典籍資料総合研究班 古典籍資料研究プロジェクト  
「歌合の本質とその集積についての研究」

源俊頼の歌合評語—六条藤家への影響をめぐって—

『四生の歌合』の構造

2023年2月26日(日)14:00～17:00

オンライン開催 (Zoom)





---

---

❖ 概 要 ❖

---

---

2023年2月26日（日）、古典籍資料総合研究班主催の古典籍資料研究プロジェクト「歌合の本質とその集積についての研究」の一環として、溝端悠朗氏（高野山大学専任講師）と大山和哉氏（同志社大学助教）を講師に招き研究集会在開催された。溝端氏は「源俊頼の歌合評語一六条藤家への影響をめぐって」、大山氏は「『四生の歌合』の構造」と題して研究報告を行った。安井重雄氏（龍谷大学文学部教授）の司会の下、両氏の報告に続き、参加者全員での討論が行われた。

---

講演者： 溝端 悠朗 氏（高野山大学 専任講師）

---



溝端氏は、まず源俊頼（1055～1129）が判者を務めた歌合（衆議判の執筆の場合も含む）を一覧表に示したあと、俊頼が関与した歌合の詠歌が六条藤家（清輔）周辺への影響例を提示した。ついで、俊頼が初めて用いた、または特徴的に用例数の多い歌合評語を収集し、とりわけ「おびただし」「てづつ」「よみます」を取り上げて、それらの享受や展開を分析した。その結果、俊頼が創出した歌合評語は、清輔を中心とした六条当家の判者へ引き継がれていたが、その後全く用例がなく、消えていったという場合も多い。最後に未解決の



課題を述べて報告を締めくくった。

---

講演者： 大山 和哉 氏 (同志社大学 助教)

---



大山 氏

大山氏は、従来すべて木下長嘯子著かとされてきた江戸時代前期成立の異類物歌合『四生の歌合』を取り上げ、先行研究を振り返り、作品の成立・内容に関する問題について考察を加えた。原形本『虫歌合』と古活字本『四生の歌合』における本文・刊記等を比較した結果、『四生の歌合』作者は現状、不明とせざるを得ないとする。また従来『四生の歌合』本文内容に対する検討の足りなさに鑑み、大山氏は、その内容に注目し、主にどのような典拠によって本文が作成されたかを考究することを通して、当該作品の成立背景、特徴をあぶり出そうと試みた。



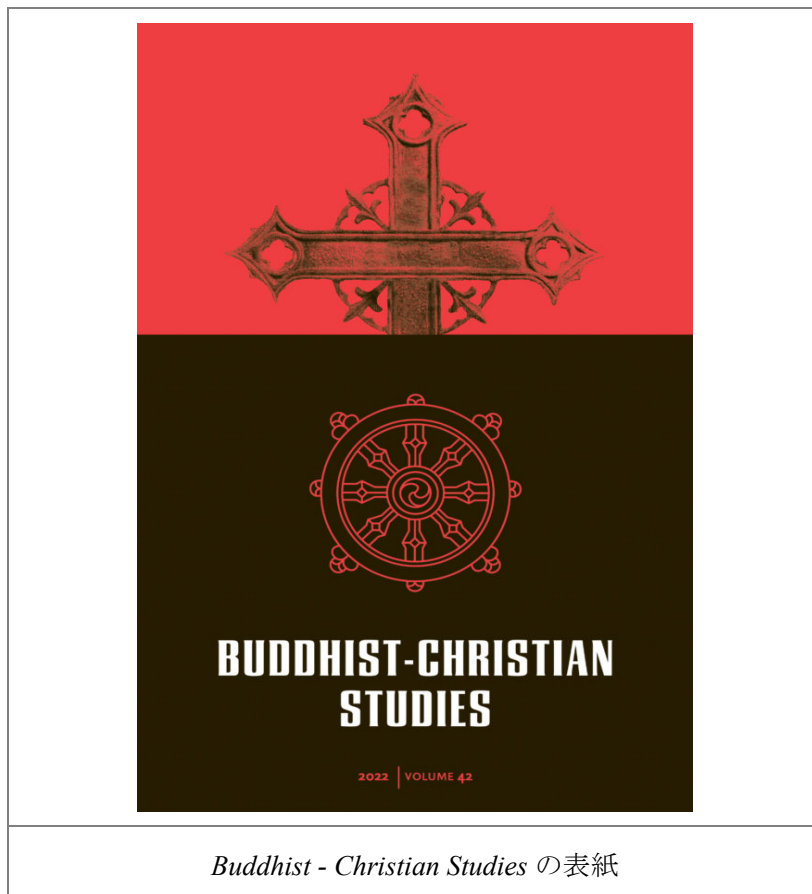
❖ その他 ❖

---

## **Buddhist - Christian Studies, Vol.42**

**Society for Buddhist-Christian Studies,  
University of Hawai'i Press, Oct 2022**

---



---

---

❖ 概 要 ❖

---

---

2016年から2019年までの3年にわたって、龍谷大学世界仏教文化研究センターの主催で *Conversations in Comparative Theology: Shin Buddhism, Christianity, Islam*. (比較神学の対話—真宗、キリスト教、イスラム教) という題目のもと、宗教間対話プロジェクトが実施された。本プロジェクトの主要な目的は、真宗、キリスト教およびイスラム教といった3つの宗教を研究対象とする研究者が、これらの宗教における共通のテーマについて発表し、議論できる一連の学術的なイベントを開催することであった。このプロジェクト期間中に、全部で4回にわたって研究会が開催され、最終会は2019年に行われた。この一連の会議で発表された研究は、8本の論文として2022年刊行された *Buddhist-Christian Studies* 第42号に収録された。著者は、廣田デニス、Peter C. Phan, David Matsumoto, Maria M. Dakake, James L. Fredericks, Bernhard Nitsche, Imtiyaz Yusuf, Perry Schmidt-Leukel である。これらの論文の発表は、廣田デニスと Perry Schmidt-Leukel の尽力により可能になった。これらの8本の論考は、いずれも宗教間対話に関係しているものの、実際には仏教とキリスト教の交わりについて論じない論考もあり、宗教間対話の研究分野において大きな貢献である。



---

龍谷大学世界仏教文化研究センター  
2022年度 研究体制

---



---

---

## 龍谷大学世界仏教文化研究センター 2022 年度研究体制

---

---

---

### ❖ センター長 ❖

---

---

脇田健一 龍谷大学社会学部・教授

---

---

### ❖ 副センター長 ❖

---

---

能仁正顕 龍谷大学文学部・教授

---

---

### 1) 基礎研究部門（教義的・歴史的・文化学的・文献学的研究）

---

---

楠淳澄（研究部門長） 龍谷大学文学部・教授

#### 1. 親鸞浄土教総合研究班

杉岡孝紀（研究班長） 龍谷大学文学部・教授

井上見淳、井上善幸、岩田真美、内田准心、内手弘太、打本弘祐、葛野洋明、佐々木大悟、高田文英、武田晋、嵩満也、玉木興慈、殿内恒、那須英勝、鍋島直樹、能美潤史、藤能成、森田敬史、森田眞円

#### 2. 西域総合研究班

三谷真澄（研究班長） 龍谷大学国際学部・教授

市川良文、岩井俊平、岩尾一史、岩田朋子、入澤崇、岡本健資、徐光輝、曾我麻佐子、玉井鉄宗、中田裕子、福山泰子、藤原崇人、村岡倫

#### 3. 古典籍資料総合研究班

安井重雄（研究班長） 龍谷大学文学部・教授

#### 4. 大蔵経総合研究班

能仁正顕（研究班長） 龍谷大学文学部・教授

青原令知、阿部泰郎、石川知彦、大谷由香、楠淳澄、野呂靖、長谷川岳史、早島慧、藤丸要、三谷真澄、道元徹心、吉田哲

#### 5. 仏教史・真宗史総合研究班

中西直樹（研究班長） 龍谷大学文学部・教授

#### 6. 特定公募研究

井上見淳、井上善幸、岩尾一史、岩田朋子、内田准心、岡本健資、佐々木大悟、殿内恒、能仁正顕、能美潤史、山口雅広

---

---

## 2) 応用研究部門 (社会的諸課題への応答・仏教の現代的意義の追求)

---

---

鍋島直樹 (研究部門長)

龍谷大学文学部・教授  
CHSR・センター長

---

### 人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター(CHSR)

---

吾勝常行、井上善幸、井上見淳、猪瀬優里、岩田真美、内田准心、内手弘太、黒川雅代子、武田晋、殿内恒、打本弘祐、葛野洋明、佐々木大悟、清水耕介、杉岡孝紀、高田文英、嵩満也、玉木興慈、陳慶昌、中根智子、那須英勝、能美潤史、藤丸要、橋口豊、濱中新吾、原田太津男、森田敬史、森田眞円

---

---

## 3) 国際研究部門 (国際的な発信と研究者交流)

---

---

那須英勝 (研究部門長)

龍谷大学文学部・教授

佐野東生、嵩満也、久松英二、古荘匡義

---

---

### 世界仏教文化研究センター博士研究員、リサーチ・アシスタント

---

---

博士研究員

崔鵬偉 (基礎研究部門)、プラダン・ゴウランガ・チャラン (国際研究部門)

リサーチ・アシスタント

魏藝 (基礎研究部門)、山田智敬 (応用研究部門)



---

龍谷大学世界仏教文化研究センター

## 2022 年度研究活動報告書

2023 年 3 月 31 日発行

編 集 龍谷大学世界仏教文化研究センター

(崔鵬偉、ブラダン・ゴウランガ・チャラン、魏藝、山田智敬)

発行者 龍谷大学世界仏教文化研究センター (代表 センター長 脇田健一)

〒600-8262 京都市下京区七条通大宮東入大工町 125-1 白亜館 3F

電話: 075-343-3812 E-mail: cswbc@ad.ryukoku.ac.jp

URL: <http://rcwbc.ryukoku.ac.jp/>

印刷所 株式会社 河北印刷

---



